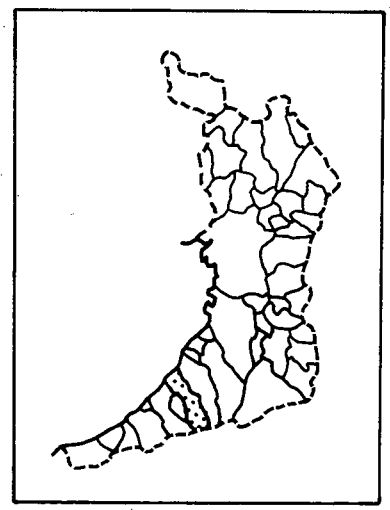
貝塚市文化財調査概要1980

貝塚市遺跡群発掘調査概要 III

―新井・鳥羽遺跡・秦廃寺跡―



1981. 3

貝塚市教育委員会

はしがき

最近、新聞紙上などで報道されている埋蔵文化財の調査には目をみはるものがあります。従来の文字に閉じこめられていた歴史学の視野を、一気に数10万年のかなたに押し広げつつあるように見えます。

本市においても加治・神前・畠中遺跡や新井・鳥羽遺跡等の調査がすすむなかで、古代より中世にいたる集落遺跡が明らかになりつつあります。

しかし反面、近年の開発事業の多発状況は、特に地下で埋もれている遺跡の存在条件をややもすれば危うくしています。本市では、この状況に対処すべく最大限の努力をしていますが、開発事業の実施にともなう緊急調査が大きなウエイトをしめているのが現状です。今回の調査もこの開発にともなう事前調査の一つです。発掘調査により承元3年の銘をもつ平瓦をはじめとして平安時代より鎌倉・室町時代を中心とした遺物を多数発見することができました。

調査にあたっては、各方面から多大なご助力・ご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

貝塚市教育委員会

教育長　岡　根　和　雄

例　　言

1. 本書は、貝塚市教育委員会が国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当実施した貝塚市遺跡群発掘調査記録である。
2. 調査は、貝塚市教育委員会社会教育課吉川和則を担当者とし、昭和55年4月1日着手し、昭和56年3月31日に終了した。
3. 調査の実施と整理にあたっては、久保泰浩、森茂、片山彰一、福森潔、西岡巌、梅田正之、池内明美、福田淳、藤原篤子、太田京美、川口順子の協力があった。また、藤沢一夫、藤沢典彦、赤川一博、福田英人、前田豊邦、玉谷哲、井藤徹、石神怡、広瀬和雄の諸氏からも有益な助言を得た他、土地所有者、田中直治、麻生川満氏からも多大な協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の作成は、新井・鳥羽遺跡を梅田が、秦廃寺跡を池内が中心となり、参加者全員で行った。
5. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望したい。

目　次

第1篇　新井・鳥羽遺跡……1
1. 層位と遺構……2
2. 遺　物……7
3. まとめ……31
第2篇　秦廃寺跡……32
1. 層　位……32
2. 遺　物……33
3. まとめ……42

挿図目次

第1図　位置図……1
2　断面実測図……2
3　断面実測図……3
4　第1区遺構実測図……3
5　SK－A実測図……4
6　SK－B実測図……4
7　SE－I断面実測図……4
8　SD－I断面実測図……5
9　遺構実測図……6
10　軒丸瓦……9
11　軒丸瓦……10
12　軒平瓦……12
13　軒平瓦……13
14　丸瓦……16
15　平瓦……19
16　平瓦……20
17　平瓦……21
18　文字平瓦（HR06）……23
19　井筒……25
20　その他の遺物……27
21　平瓦……28
22　平瓦の接合技法……29
23　丸瓦玉縁の傾向……29
24　平瓦凸面調整……30
25　瓦の部分名称……31
26　位置図……32
27　断面実測図……33
28　遺物実測図……34
29　陶磁器……36

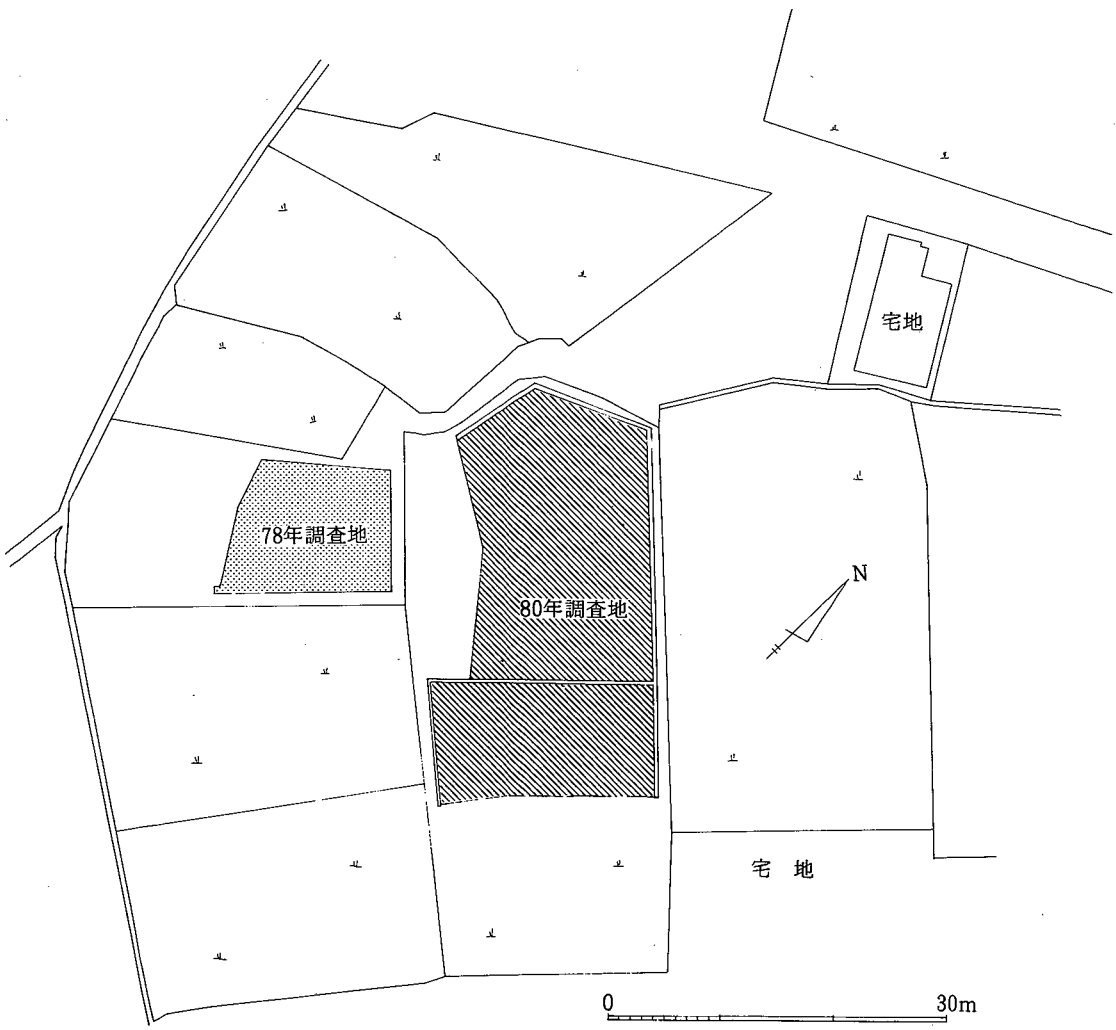
図版目次

第1図　遺跡周辺航空写真
2　新井・鳥羽遺跡遺構写真
3　新井・鳥羽遺跡遺構写真
4　新井・鳥羽遺跡遺構写真
5　新井・鳥羽遺跡遺構写真
6　新井・鳥羽遺跡遺構写真
7　新井・鳥羽遺跡遺構写真
8　新井・鳥羽遺跡遺構写真
9　新井・鳥羽遺跡遺構写真
10　新井・鳥羽遺跡遺構写真
11　新井・鳥羽遺跡遺構写真
12　新井・鳥羽遺跡遺構写真
13　秦廃寺跡遠景・調査区写真
14　秦廃寺跡遺物写真
15　秦廃寺跡遺物写真

貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅲ

第１篇　新井・鳥羽遺跡

新井・鳥羽遺跡は、貝塚市の北東部、海塚大池、小池、今池を中心に、国鉄阪和線と第２阪和国道に挟まれた新井・鳥羽両村にまたがる東西300m、南北500mの遺跡である。又、近木川、津田川に挟まれた低位丘面のほぼ中央に位置し、現在も一部集落となってはいるが、まだ田畑として利用されているところも多い。1976年度版の大阪府文化財地名表に無土器～室町時代の遺物散布地と記載されて以来、今池の西、海塚大池の東側において、住宅建設計画等に先立ち、府・市教育委員会により幾度か試掘調査が行われているが、今池の西側においては遺構、遺物等ほと

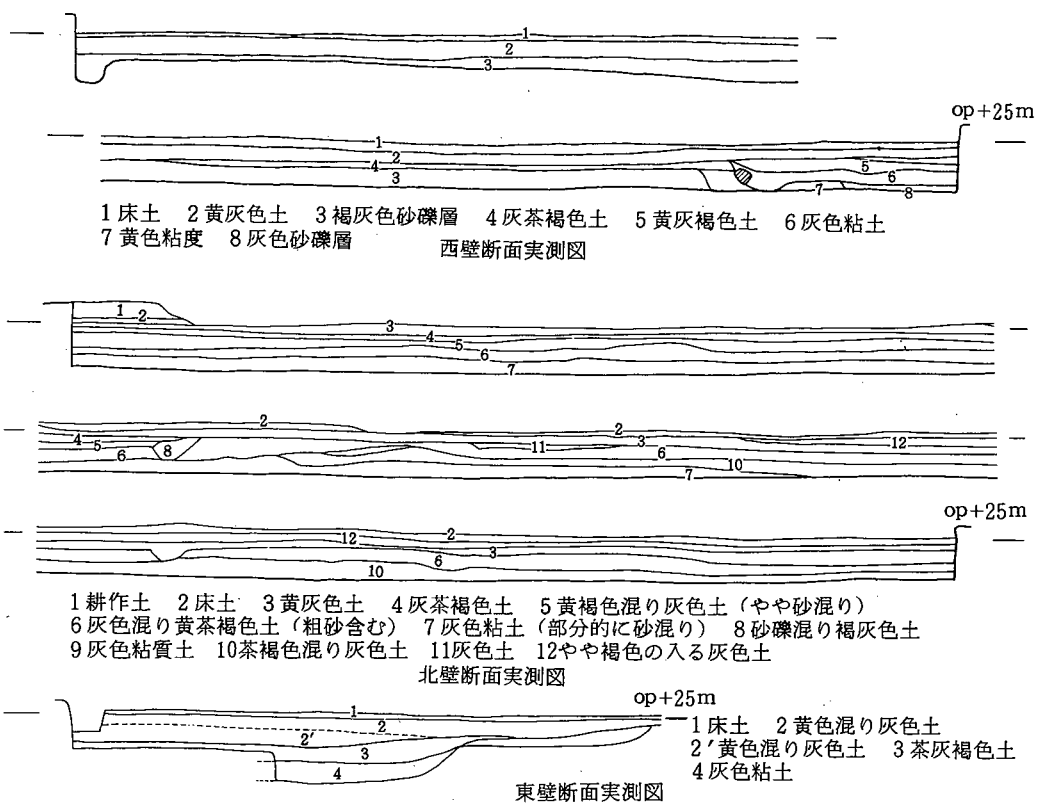


第１図　位置図

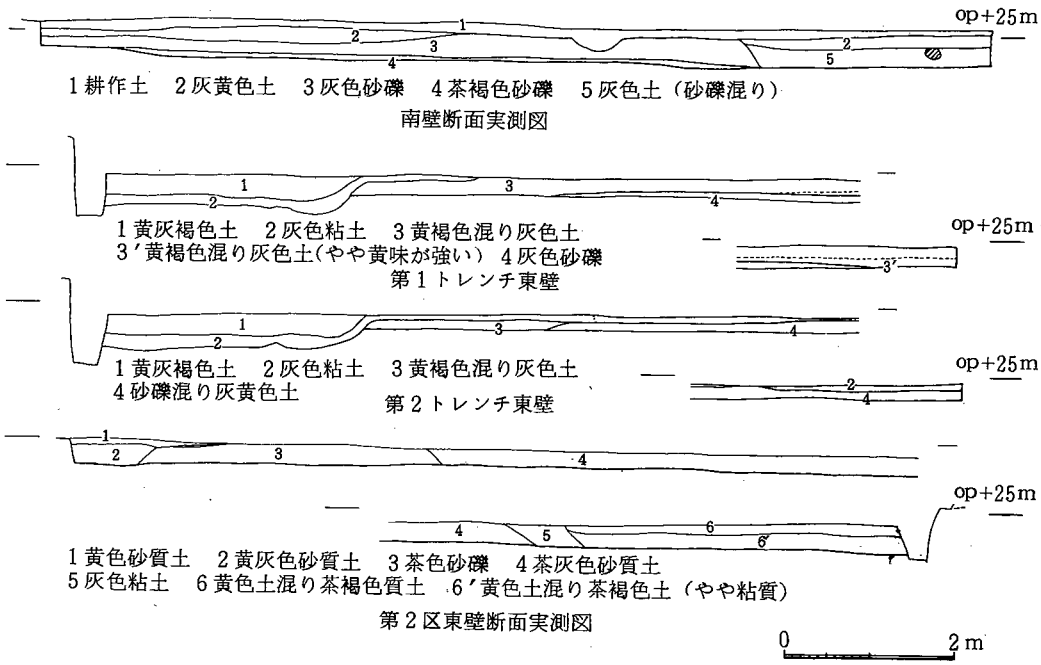
んど見い出しえていない。しかし、海塚大池の東側においては78年度の調査において鎌倉〜室町時代を中心とする井戸、溝、土拡、ピット等や、瓦、土師質土器、瓦器等が出土している。今回の調査地はその東隣りにあたる貝塚市新井字堂ノ前21番地に所在し、住宅建設計画に先立つもので、前年度末より引き続き実施した。湧水のため調査区内に排水溝を設けたため、東側を第1区西側を第2区とした。調査面積は約600㎡である。

1. 層位と遺構

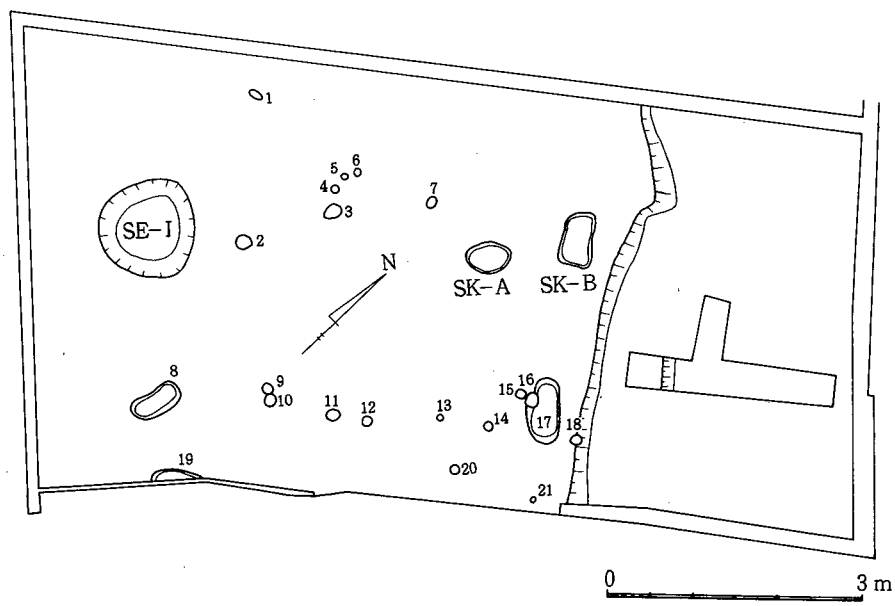
調査地の現地表は、標高25.2〜25.3mで地表面はほぼ平担である。層序は基本的に地表下約40cmは第1層が暗灰色土、第2層が淡灰色土、第3層が黄灰色土、第4層が灰茶褐色土と続く。以下遺構面はかなりばらつきがみられるが、北側は黄灰褐色土、灰色粘土となり黄色粘土もしくは灰色砂礫層がベースになるものと思われる（調査地北端にて約40cm低くなる）。又、第1区南壁では第3層に灰色砂礫層が、第2区西壁では第4層が褐灰色砂礫層となる。調査は第1層及び第2層の一部を機械にて以下人力にて掘削を行なった。各層とも若干の遺物を出土しており、上2層は主に近世・近代の陶磁器瓦片を、第3・第4層は中世の瓦・土器等を包含している。以下調査区毎に概要を記す。



第2図　断面実測図



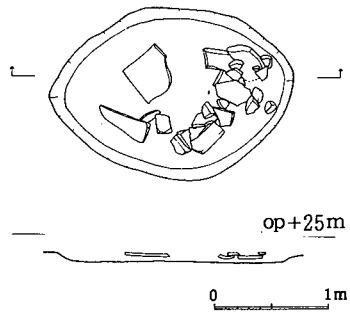
第 3 図　断 面 実 測 図



第 4 図　第 1 区遺構実測図

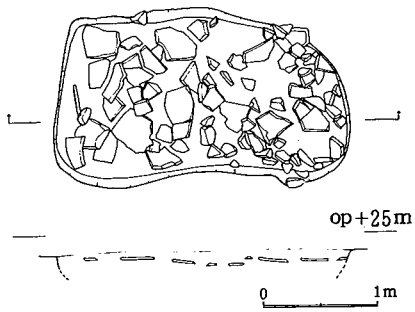
第　1　区

調査地の東側にあたり17m×11mの長方形の調査区である。前述したように基本的な層序はかわらないが東端中央部においては地表より約30cmで黄色粘土の安定した地山となる。地山面は西側に低く又、北側はトレンチによりかなり下がることが予想されるため、中央にT字トレンチを設定した。層位はかわらないが中央やや北より灰色粘土にのり瓦が多数出土しており、灰色粘土層からも少し加工を施した木片等も出土した。又、南側は灰色砂礫層が斜め方向に走り海塚下池に向かい若干低くなっていく。多くの遺構は黄色粘土をベースに検出されたがＳＥ－１ほかいくつかの遺構は第２区東壁の断面図の茶色砂礫層を結ぶ線で砂礫層をベースに検出したものである。以下遺構の概略を記す。



第５図　ＳＫ－Ａ実測図

ＳＫ－Ａ、110cm×80cm、深さ10cmの楕円形の浅皿状の掘り方を呈す遺構である。少し浮いた状態で平瓦片が十数点出土した。堆積土は砂及び砂質土である。



第６図　ＳＫ－Ｂ実測図

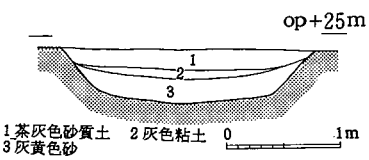
ＳＫ－Ｂ、130cm×70cmの長方形の掘り方を呈する。上面は少し埋土がかぶっているが、瓦がぎっしりとほうりこまれたようにつまっていた。完掘はできなかったが、２段の掘り方を呈するようでもあり、文字瓦をはじめ遺物収納箱５杯の瓦が出土した。

ＳＥ－１、直径230cm前後のいびつな円形を呈し、深さは50cmを測る。堆積土は上から茶灰色砂質土、灰色粘土、黄灰色砂となる。上・中層から瓦、須恵質擂鉢、瓦器といった遺物が出土した。調査中もかなりの湧き水があり、 施設等確認しえなかったが水にかかわりある遺構と考えられる。

その他、ピット等を検出したが下記表の如くピットは20cm全のものが多いようだが直径15～40cm、深さ５～36cmを測る。相互の関係は見い出しえなかったが、遺構番号20、14、15、18のピット間を建物の可能性として考えられなくはない。

第　2　区

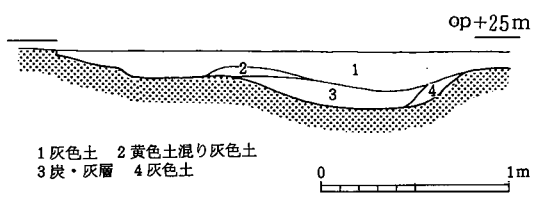
第１区より少し遅れて調査を開始したが途中調査打ち切りとなったため、遺構の検出作業は十分なしえなかった。一応第４層上面にて遺構の検出作業を行った。調査区中央にて南北方向に走る溝を３条検出した。溝幅は20



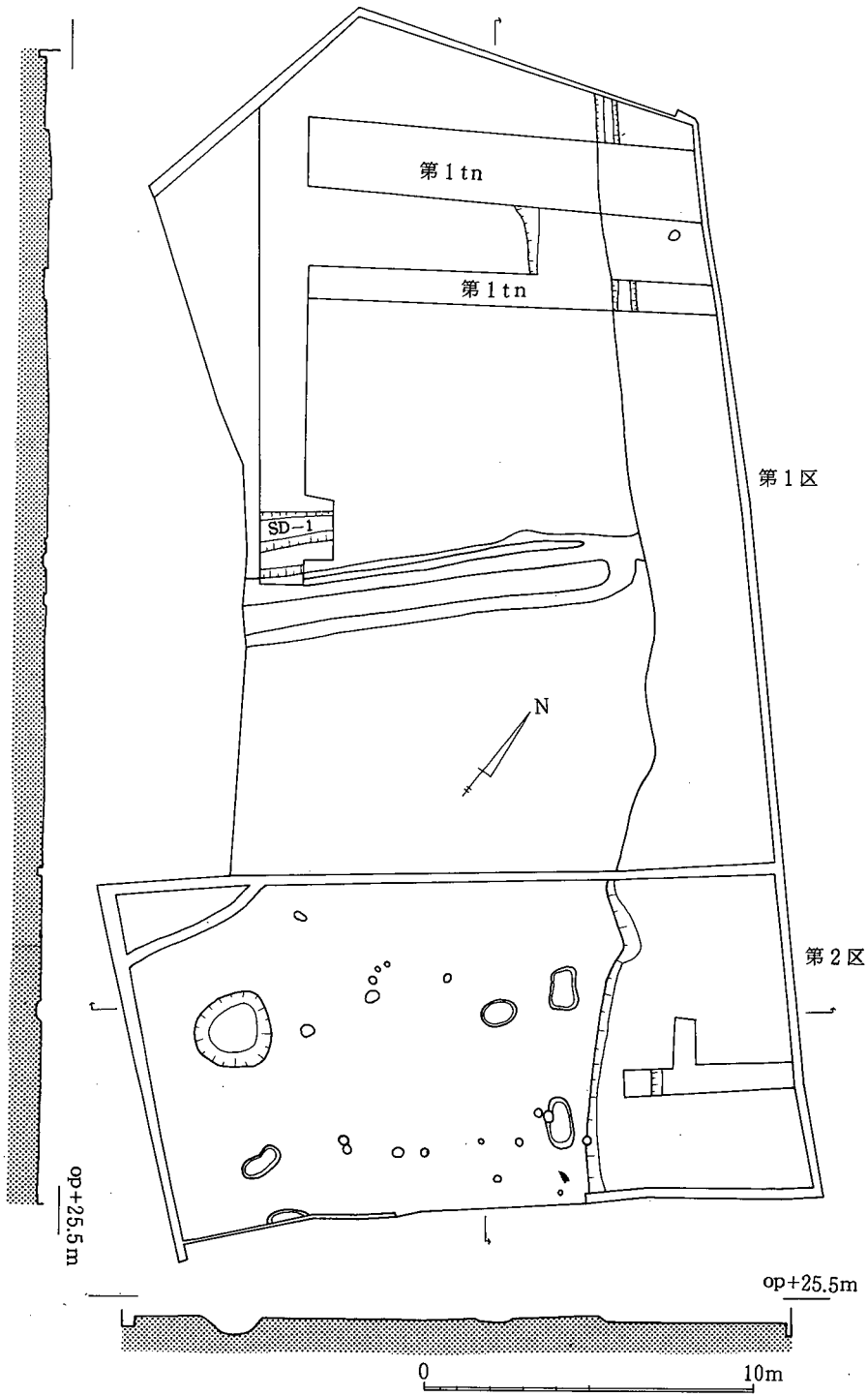
第７図　ＳＥ－１断面実測図

遺構番号	法量（長径×短径×深さ）cm	堆積土	備　　考	遺構番号	法量（長径×短径×深さ）cm	堆積土	備　　考
1	32×16×7	灰褐色土		12	24×24×7	灰褐色土	
2	36×32×14	灰褐色土	瓦器	13	18×15×11	黄灰色土	
3	42×30×7	黄灰褐色土	〃	14	24×20×6	灰褐色土	
4	22×20×5	〃		15	22×20×6	〃	
5	20×14×5	〃		16	40×30×33	〃	
6	16×16×5	〃		17	155×76×15	〃	土師質土器
7	28×24×10	〃	土師質土器	18	26×24×33	黄茶灰色土	
8	124×56×10	灰褐色土	〃	19	124×26×10	黄灰色土	
9	30×24×6	黄灰色土		20	26×24×36	黄灰褐色土	
10	30×26×6	〃		21	14×14×6	灰褐色土	
11	35×26×23	灰褐色土	土師質土器 瓦器				

～50cm、深さ6～10cmを測る。北側では1条となり、北の灰色粘土の中に消えていく。流れの方向は不明である。次にトレンチにより層序を確認するため、西より南北方向に3本のトレンチと南に東西方向のトレンチを設定した。3本の同方向のトレンチでは黄灰褐色土、灰色粘土、黄褐色砂質土とほぼ同様の層序を呈した。第2トレンチ北端において直径30cm、深さ20cmの黒緑色泥土のピットが検出された。又、南トレンチにおいては、上層の2条の溝のすぐ西に同方向の幅120cm、深さ30cmの灰と炭、瓦のつまった溝（SD－1）を検出した。残念なことに夜のうちにあらかたの瓦は掘り上げられてしまっていたが、U字形断面の溝に底まで瓦がみられたようである。78年度調査の溝－2から続く落ち込み2との関連も注目される。



第8図　SD－1　断面実測図



第 9 図　遺 構 実 測 図

2. 遺　物

今回の発掘により出土した遺物の総量は、コンテナの数にして21箱。（破片が多いため１箱当りの密度は高い。）そして、このうちのほとんど９割５分までを屋瓦が占める。屋瓦以外の遺物の出土は僅かにコンテナ１箱を費したにすぎない。

屋瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の各種が出土しており、その割合は（軒丸瓦＋丸瓦）：（軒平瓦＋平瓦）＝３：１を示す。また全体的に細片が多く、接合・復原を試みたものの結局完全復原されるものは１個体をも見つけることができなかった。これは出土遺構の性格と大きく関わるものと思われる。さらに、瓦当部を残す軒丸瓦。軒平瓦も後で示すように点数にしてごくわずかなものであった。それ以外の丸瓦・平瓦もほとんど総て完全復原されない断片ばかりであり、出土個体全体を総合的に分析した型式分類等の考察には及び得なかった。ただ、これらの中に年号を有する文字平瓦を確認し、この瓦を基準にして、別に行った軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせ４型式をこれに当てはめ、全体を７期間に分類することができた。

文字瓦は承元３（1209）年の年号を刻するもので、一部が欠損、浅刻の文字もあるため刻文の全容は知り得ないが、おおよその性格は把むことができた。絶対年代を示す基準資料であり、共伴遺物の内容・性格が注目されるところであるが、屋瓦以外の出土遺物の少ないのが残念である。

さて、屋瓦以外では井筒と思われる瓦質土器の他、滑石製鍋・羽釜・壺・土師皿・擂鉢・瓦器碗・土錘・銅銭等が出土している。また陶磁器類では中国製の青磁・染付をはじめ、伊万里焼・瀬戸焼・染付等の出土がみられた。

出土遺物の時期は、屋瓦についてはおよそ文字瓦に前後する平安時代末期から鎌倉～室町時代にかけてのものということができる。しかしながら屋瓦以外の遺物については、必らずしもこの時期に相当するものとは言い得ない。

本稿は、まず出土遺物全体を屋瓦と屋瓦以外とに分け、前者を中心にまとめたものである。尚屋瓦については今回は特に遺物の個体観察に重点を置いてまとめた。それゆえ瓦全体に対して行った７期間の分類についても、「考察」の項では単に該当する個体番号を示したにすぎない。各期における各種類別屋瓦の特徴及び傾向（時期判定基準）については、面倒ではあるが、各個体観察を遡って参照されたい。総てはそこに帰すると言える。これは、観察の対象とした瓦の個体数が必らずしも多くはないことから、各期におけるそれぞれの瓦が示す特徴を一般化して概説するよりも、個体観察に限定する方に、より妥当性があると判断したからである。

従って全体的なまとめ方に不充分な点は多いが、この点を御了解頂きたい。

屋　瓦

出土した瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の組み合わせから７期に分類することができた。この分類は、４型式に分かれる軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせをその特徴から時代順に配列し、これに丸瓦・平瓦を加えて７期間に分類したものである。各期間は承元３年の年号を有する文字平瓦の属する第Ⅲ期を基準に、それ以上に遡る第Ⅱ期及び第Ⅰ期を考え、更に第Ⅲ期につづく第Ⅳ期から第Ⅶ期までを設定したものである。

ここではまず軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦を各種類別に、主たる個体について観察を行い、そのあとで各期間についてまとめることにする。なお、出土量の大半を占める細片についての総合的分析は、今回は割愛することにした。

軒　丸　瓦

軒丸瓦の出土は今回極めて少なく、僅かに蓮華文軒丸瓦２点と三巴文軒丸瓦５点、それに宝塔文軒丸瓦と思われる断片１点の合わせて計８点を確認したにすぎない。全体の出土量からすればもう少し多くても不思議ではないと思われるが、細片を加えても11点にとどまる。

さて、このうち細片と宝塔文軒丸瓦片を除く７点については、これを５型式に分類することができた。しかし何れも瓦当面を何等かの形で欠いており、丸瓦の接合された形で出土したのはただ１点のみであった。以下、上述の８個体について解説する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（直径約12㎝　ＮＭ０１）　　第10図(1)　図版第五(1)

肉厚の中房は直径5.4㎝を測り、その上に１＋４＋８コの蓮子を配す。中房周囲をやや幅広の複弁八葉がめぐる。各子葉は肉太の楕円形を呈し丸く盛りあがる。周縁は幅0.8㎝に対し高さ1.4㎝を測る。蓮子・花弁ともに大きさは不揃いで、周縁部の粘土のつめ元も荒く、全体的に粗雑なつくりである。瓦当裏面の調整は直線状痕が認められ篦ナデ。丸瓦接合部は指で押しつけている。胎土はキメが細かく良撰で、焼成はやや軟質。灰白黄色を呈す。瓦当裏面は部分的に明灰色を呈すが、炭素の付着はほとんどない。

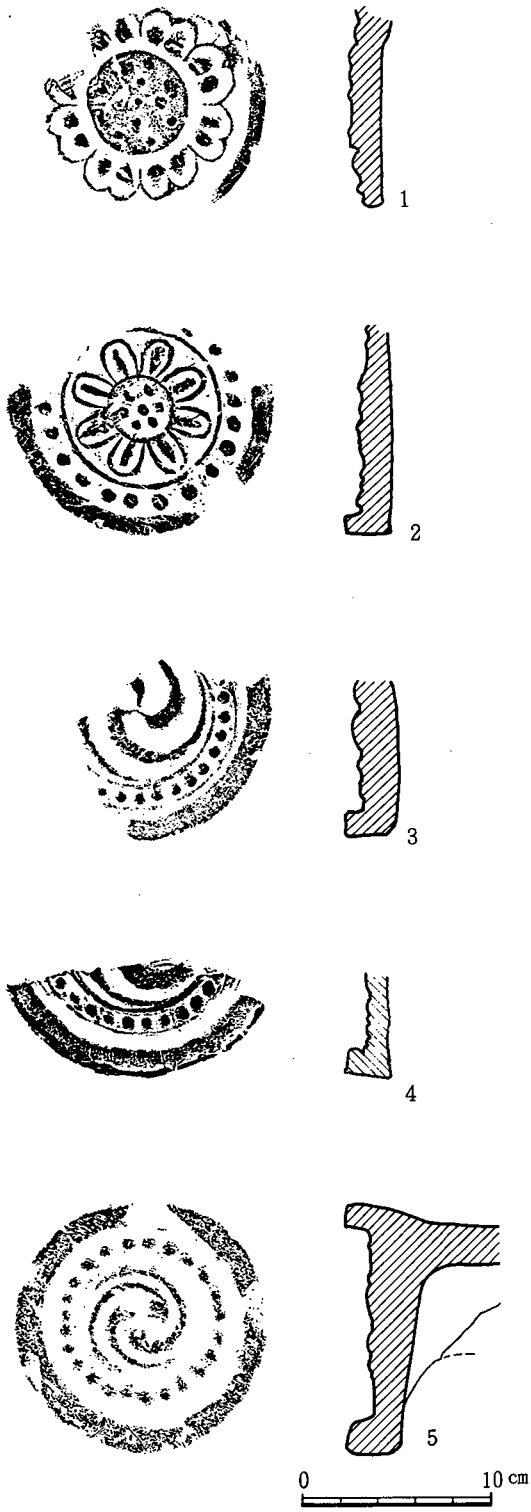
単弁八葉蓮華文軒丸瓦（直径14.0㎝　ＮＭ０２）　　第10図(2)　図版第五(2)

直径3.5㎝を測るやや突出した中房内に、平均直径0.6㎝の蓮子を１＋５に配す。幾分縦に細長い独立単弁八葉がその周囲をめぐり、一本の肉太の圏線が外区と内区とを画している。外区には推定22個（うち14個遺存）の珠文が配され、平均直径1.0㎝に及ぶ珠文は比較的密なる配置を呈す。周縁は幅1.0㎝に対し高さも等しく1.0㎝を測る。文様面ほぼ中央に走る一本の直線は笵型の板木目であり、これに平行する細かな線が幾条も認められる。瓦当裏面は指ナデによる調整。

胎土は砂粒・小礫を多く含み、焼成は軟質。二次加熱を受けているため、色調は灰白黄色に加え赤茶褐色を帯びている。炭素の付着は瓦当裏面に若干みうけられるのみ。

三巴文軒丸瓦（直径14.5㎝　ＮＭ０３）　　第10図(3)　図版第五(3)

瓦当部のみの約½片である。巴の尾は長く後ろに引き、ほぼ半周して圏線と結合する。頭部と



第10図　軒　丸　瓦

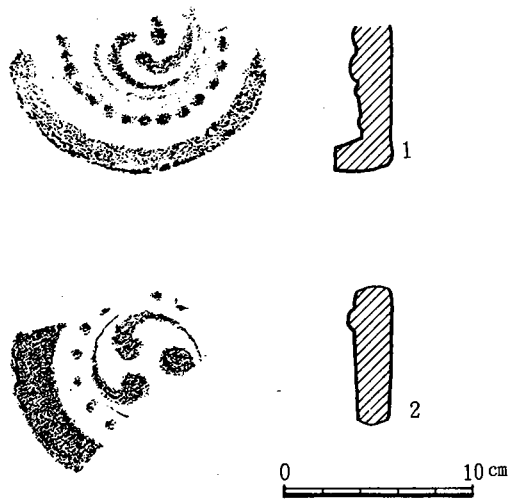
尾部とのくびれが全く存在しない。右方向に巻く巴頭部先端は尖っており、ほぼ中心で三巴が結合する。内圏線は巴の尾先を吸収し、やや太目でしっかりとした隆線である。珠文数は推定で28個が存し（うち11個遺存）、密なる配置である。外圏線も認められるが、内圏線に比して弱い隆線である。周縁幅1.5㎝に対し周縁幅0.9㎝を測り、文様面は比較的浅い。瓦当裏面はナデによる調整。胎土・焼成ともに良好で、明灰色を呈す。

三巴文軒丸瓦（復原直径約14.8㎝　ＮＭ０４）　第10図(4)　図版第五(4)

中心部を欠いているため巴文の詳しい性格は不明であるが、内・外両圏線を有し、その珠文の配置及び全体的なつくりから前記No.3と同笵であることがわかる。周縁幅は1.4㎝、周縁高0.8を測る。焼成前に外圧を受けたものと思われ、周縁はやや歪曲する。瓦当裏面には炭素が付着しているが、第2次整形時の粘土は恐らく剥離したものと思われる。胎土は若干の砂粒を含み、焼成は良好。薄白灰色を呈す。

三巴文軒丸瓦（直径13.8㎝　NM05）　第10図(5)　図版第五(5)

二次加熱を受けて脆くなった瓦当は風化が著しく、文様は必らずしも明瞭ではない。巴は右方向に巻き、その尾は長く内圏線に吸収される。頭部先端は判然としないがほぼ中央に集合している。頭部と尾部とのくびれが若干みとめられ、珠文は24個を密に配す。周縁幅は上部1.5



第11図　軒丸瓦

cm、下部1.9cm、周縁高は1.4cmを測り文様面は比較的深い。瓦当は厚く、瓦当裏面の丸瓦接合位置がやや低くなっている。丸瓦凹面には6×5／cm²の布目が残り、丸瓦前幅は12.8cmを測る。凸面はきれいに擦り消されていて叩き目は全く残らない。瓦当裏面はナデによる調整。胎土は3～4mm程度の小礫・砂粒を多く含み、焼成は軟質。薄灰褐色を呈す。

三巴文軒丸瓦（直径14.2cm　NM06）第11図(1)　図版第五(6)

瓦当部のみの約½片である。二次加熱を受けて脆くなり、全体的に風化している。巴文は右巻きで小さく、頭部先端は丸味を帯び、頭部と尾部とのくびれを有す。珠文は13個が遺存し密なる配置で、圏線の有無は判然としない。周縁幅1.6cmに対し周縁高1.3cmを測り、文様面は比較的深い。瓦当裏面の調整はナデによる。胎土は小礫・砂粒を多く含み、焼成は軟質。薄灰黄褐色を呈す。

三巴文軒丸瓦（復原直径約13.8cm　ＮＭ０７）　第11図(2)　図版第五(7)

瓦当部のみの約⅓片である。左に巻く巴文は頭部が極端に大きく、尾部との明瞭なくびれを有する。尾は細く短かく、円形を呈する頭部との差異が著しい。珠文は5個が遺存するだけ（推定16個）であるが各々小さく、粗なる配置である。圏線は存在せず、巴の尾部先端が隣の巴中程に接続する。周縁は幅2.4cmに対し高さ0.6cmを測り、周縁は幅広で文様面は浅い。全体的に薄手のつくりである上に、瓦当裏面は指頭圧痕による凹凸があって、整形は不充分である。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質。色調は薄灰褐色を呈す。

宝塔文軒丸瓦（直径――― ＮＭ０８）

瓦当部の約¼片であるが表面のほとんど大半が剥離しており、斜格子文がわずかに認められるのみである。残存部は瓦当と丸瓦の接合部で、裏側からつめた粘土が指ナデにより滑らかな曲線を描く、瓦当面の厚さは約1.1cm。恐らく宝塔文軒丸瓦の断片とみて間違いないと思われる。胎土は砂粒・小礫を含み、焼成は軟質。剥離していない部分は薄灰褐色を呈す。

軒　平　瓦

出土した軒平瓦は、顎部のみの剥離片2点と顎部の剥離欠損した平瓦片2点を含めて13点である。これらの瓦当文様は均整唐草文と連珠文の二種類である。顎部の剥離した平瓦片2点を除いた他の11点についてみると、個体相互に明らかに同笵関係と認められるものがあり、均整唐草文

の４個体は３型式に、連珠文の７個体は１型式と捉えることができ、あわせて４型式に分けることができた。顎部剥離の平瓦２点については接合技法のところで扱うことにし、以下残る11点について若干の観察を行う。

均整唐草文軒平瓦（復原上弦幅24㎝　ＮＨ０１）　第12図(1)　図版第六(1)

文様面は三反転する均整唐草で、各反転部内側に１本の子葉とそれを飾る３＋１の小さな珠文がつく。中心飾りは※状で独立した観を呈している。文様の彫りはやや深く極めて明瞭であるのに対して周縁は低く、その高さは文様とほぼ同程位である。顎は曲線顎と呼ばれるべきもので顎長2.0㎝を測り、丁寧なナデ調整を施している。平瓦凸面には糸切り痕とやや荒い縄目叩きが明瞭に残りはなれ砂が若干付着する。凹面には糸切り痕とともにかすかに布目が残るが、全体をすり消している。平瓦凹面瓦当上部をわずかに面取りしている。胎土は若干の砂粒を含むが良撰で焼成はやや軟質。色調は明灰褐色を呈す。

均整唐草文軒平瓦（復原上弦幅24㎝　ＮＨ０２）　第12図(2)　図版第六(2)

前記ＮＨ０１と同笵である。瓦当面にはなれ砂の付着が若干みられる。顎部整形もほとんど同様で平瓦凸面に残る縄目叩きの条数も等しい。凹面には布目の痕跡を全くとどめず、きれいにすり消されている。しかし糸切りの痕跡が著しく残る。胎土は若干の砂粒を含むが良撰で焼成やや軟質。色調は薄灰褐色を呈す。

連珠文軒平瓦（上弦幅22.0㎝　ＮＨ０３）　第11図(3)　図版第六(3)

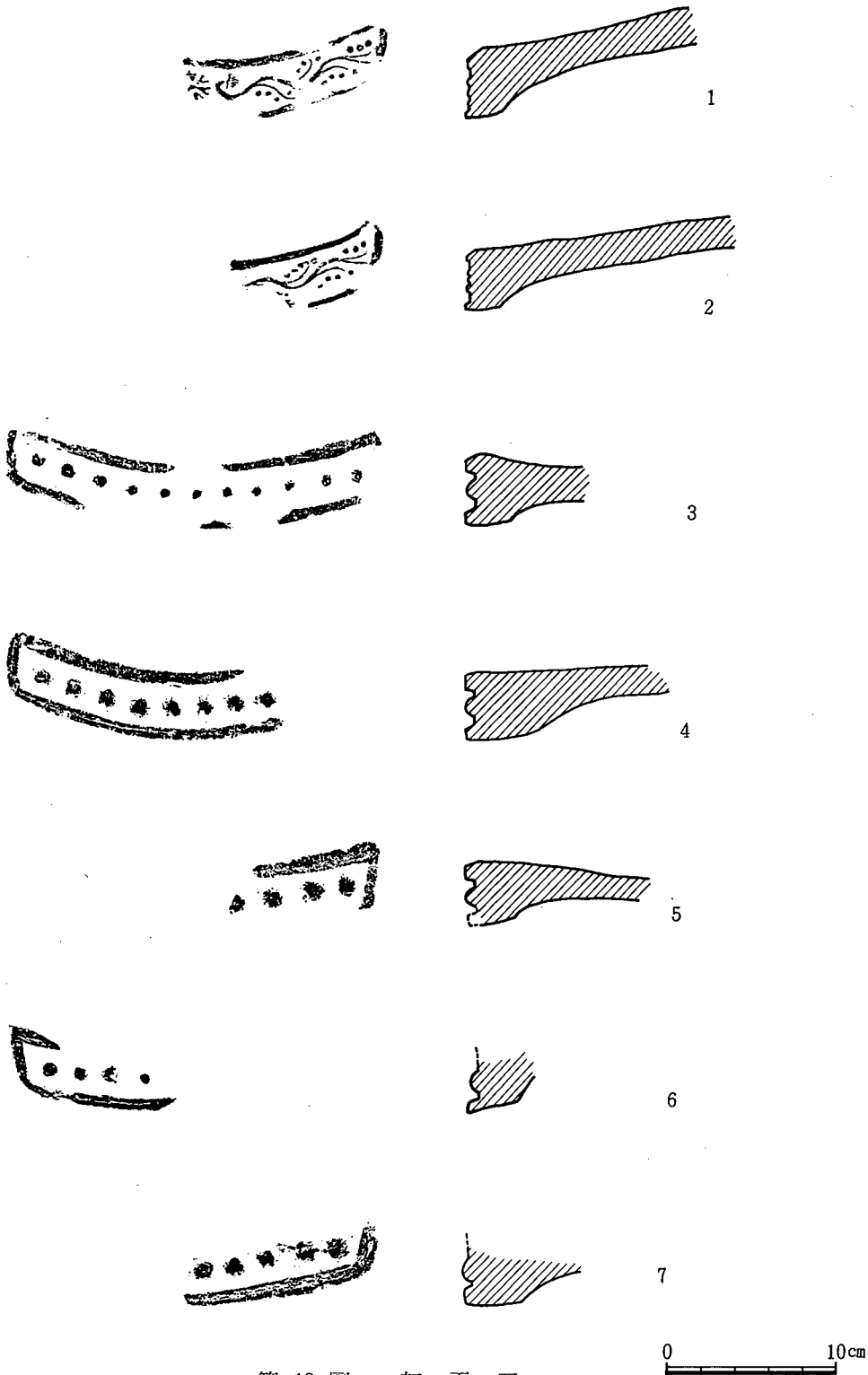
軒平瓦では瓦当部の完存する唯一の資料である。文様面には中心珠文を挟んで左右に５つずつの珠文を配し、計11個を数える。珠文は大きく平均径1.2㎝を測る。外区高は0.5㎝で文様高とほぼ等しい。また文様面右端には笵型自身の傷によるものと思われる直線状の隆線がみられる。最右端珠文中程より第２珠文を横切り第３珠文上方の周縁に至る、左上りの斜行線である。顎は微妙だがやはり曲線顎と呼ぶべきものである。平瓦部はほとんど残存しておらず詳しい調整法は不明。ただ凸面にははなれ砂の使用されたことは明らかであり、凹面には糸切り痕が残り瓦当上部を軽く面取りしている。胎土は砂粒を若干含み、焼成はやや軟質。薄灰褐色を呈す。

連珠文軒平瓦（復原上弦幅22㎝　ＮＨ０４）　第12図(4)　図版第六(4)

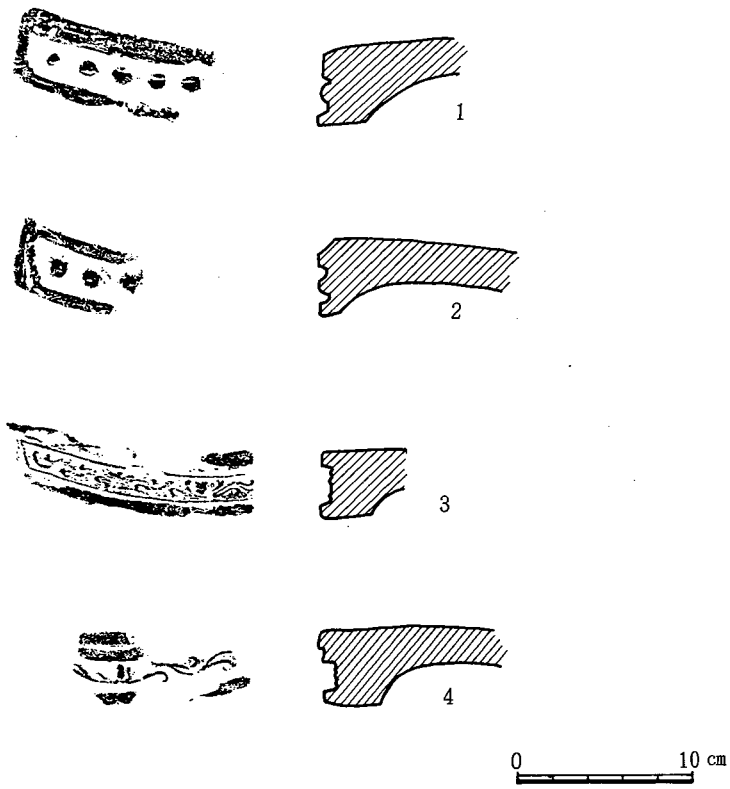
右端の⅓を欠いているが、前記ＮＨ０３と同笵である。平瓦凹面にははなれ砂が付着する。瓦当上部を軽く面取りしている。顎は顎長3.5㎝で明瞭な稜線を有し、曲線顎となっている。平瓦凸面はほとんど残らないが、残存部では丁寧なナデを施している。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質。薄灰褐色を呈す。

連珠文軒平瓦（復原上弦幅22㎝　ＮＨ０５）　第12図(5)　図版第六(5)

珠文４個を残す右半分の破片であるが、ＮＨ０３と同様の斜行隆線が認められ同笵であることが知れる。顎は顎長2.0㎝で明確な稜線を有し、曲線顎となっている。顎は横ナデによる調整。平瓦部はそのほとんどを欠いているため詳しい調整法は解らないが、やはりすり消しが行われて



第 12 図　軒 平 瓦



第13図　軒　平　瓦

いて布目は残らない。

連珠文軒平瓦（上弦幅———ＮＨ０６・０７）　第12図（６・７）図版第六（７・８）

顎部だけの剥離片である。珠文１個分の中心部を欠いているため接合はされないが、同一個体であることは間違いない。又文様面右端の斜行隆線からＮＨ０３と同笵であることがわかる。平瓦部を欠いているため整形・調整法は不明。

胎土は砂粒を若干含み、焼成はやや軟質。薄灰褐色を呈す。

連珠文軒平瓦（上弦幅———ＮＨ０８）　第13図(1)　図版第六(6)

珠文５個を残す左半分の破片である。珠文はやや大きく平均径1.3㎝を測る。脇周縁は0.7㎝と狭いが、上周縁1.3、下周縁0.9㎝を測る。顎は顎長3.0㎝を測る曲線顎である。調整は瓦当下面が横ヘラ削り及びナデ。裏面は縦方向のヘラ削り及びナデを施している。平瓦凸面は不明。凹面にははなれ砂が付着し、瓦当上部をわずかに面取りしている。胎土は砂粒を含むが良撰。焼成はやや軟質で薄灰褐色を呈す。

連珠文軒平瓦（上弦幅――― ＮＨ０９）　第13図(2)　図版第六(9)

珠文をわずかに３個残す左端部の破片である。珠文は大きく平均径1.1㎝を測る。脇区幅は本来0.6㎝であるが、笵型の瓦当部への押し当てが不適当であるため余分な粘土がはみ出し、下方では1.7㎝を測る。顎は顎長1.3㎝を測る曲線顎であり、浅顎とも呼ばれるべきものに近い。瓦当下面の調整は横ヘラ削り及びナデ。裏面は縦ヘラ削りで、平均部はほとんど残存しないがはなれ砂を使用した痕跡がみられる。平瓦凹面瓦当上部は面取りを施す。胎土は砂粒を含むが良撰で焼成はやや軟質。色調は凹面で煤状炭素の付着により灰褐色。その他は薄灰褐色を呈す。

均整唐草文軒平瓦（復原上弦幅23㎝　ＮＨ１０）　第13図(3)　図版第六(10)

瓦当面は風化が著しく、圏線によって囲まれた内区文様は判然としない。中心飾は０状で、Ｃ字形の中心葉がこれを挟む。流れる様に波を打つ文様で、各子葉先端が丸く脹んでいる。上周縁幅1.1㎝、下周縁幅1.0㎝、文様面の深さ0.7㎝を測る。顎は顎長3.1㎝の段顎を呈す。瓦当下面、顎部ともに横ナデによる調整。平瓦部は残存しないため不明。胎土は厳密には３種に分けられるがおよそ同傾向を示し、小礫を含むがキメが細かく良撰である。焼成はやや軟質で、灰褐色を呈す。

均整唐草文軒平瓦（上弦幅――― ＮＨ１１）　第13図(4)　図版第六(11)

両端を欠いているため唐草文が何反転するのか文様の全容は不明である。中心飾は米粒状を呈し、上端はほとんど上周縁に接する。中心葉は受け皿式に広がる２葉、下周縁幅1.0㎝、上周縁幅0.8㎝に更に笵型からはみ出した粘土1.1㎝が加わる。顎は顎長3.4㎝を測る段顎である。瓦当下面の調整は横ナデ、裏面は縦ヘラ削りの後ナデを施す。平瓦はほとんどを失っているが、凹凸両面にはなれ砂の付着がみられる。胎土は小礫を少々含むがキメが細く、焼成はやや軟質。色調は凹面に炭素の付着多く灰褐色。その他は薄灰茶褐色を呈す。

丸　瓦

他種と同様に細片が大半で、玉縁部を残す丸瓦片を中心に取り挙げたが、その数はごく限られている。ここでは特に各期についてその代表例を示してやや詳述し、一部は写真及び実測図の掲載にとどめることにした。

行基式丸瓦（法量不明　ＭＲ０１）　第14図(1)　図版第七(2)

前方広端部を欠いているため全長は不明。狭端弦7.5㎝、後弧高3.6㎝、残存部前弧高5.5㎝厚味は平均2.0㎝を測り、後方から前方広端部へかけて側縁は大きく広がる。

凸面は横ヘラ削りの後ナデを施すが表面にはかない凹凸が見られ、整形は粗雑である。凸面表面にみられる凹凸は、今回出土した行基式丸瓦総てに共通する特徴である。凹面には側縁に対して斜方向に布目が残る。布目は９×11／㎠で細く、縦位に皺の圧痕が残る。側縁は残存坦面1.4㎝に対し、内側へ0.8㎝の面取りを行っている。また狭端部でも1.3㎝とやや幅は狭いが面取りを施している。胎土は若干砂粒を含むが良撰。焼成はやや軟質で、凸面明灰色、凹面は薄灰褐色

を呈す。

行基式丸瓦（法量不明　ＭＲ０２）

狭端部の一部を残す破片である。前記ＭＲ０１に比して前方広端部への広がりはやや小さい。凸面の叩き目は痕跡すら認められず、横ヘラ削りを施すがやはり凹凸が顕著である。凹面には糸切りの痕跡もみられ、布目痕は８×10／㎠で側縁に対して斜方向につく。側縁は内・外両側に面取りを施し、坦面0.８㎝に対し内側面取り1.０㎝、外側面取り0.４㎝を測る。ただ、一方の側縁内側の面取りは1.５㎝と極端に広くなっている。厚さは最高で1.７㎝、残存部後弧高は3.８㎝を測り、やや薄手である。胎土はキメが細く良撰で焼成は硬質。明灰色を呈す。

行基式丸瓦（全長27.3㎝　ＭＲ０３）　図版第七(1)

全長27.3㎝を測り、行基式丸瓦では全長の知り得る唯一の資料である。しかし両側端縁の大半を欠いているため両端弦は不明。弧高は残存部側縁が水平でないため復原値すら求め得ない。

凸面の叩き目はその痕跡すら認められず、縦方向のヘラ削りとナデによる調整が施されている。表面の凹凸は前記２個体に比して少ない。広端縁は横ヘラ削り、凸面広端縁部はナデを施し凸面との間に若干の段を有する。狭端部はこれに対してヘラ削りによる整形ではなく、薄く粘土をつまみ切ったようにおさめている。凹面は斜方向に弧を描く糸切り痕が認められ、布目痕はほとんど残らない。厚味は広端縁付近で1.６㎝、狭端縁付近で0.９㎝を測り前記２個体に比して小型で薄手のつくりである。胎土は若干の砂粒を含み、焼成はやや軟質。灰黄白色を呈す。

玉縁付丸瓦（法量不明　ＭＲ０４）　第14図(3)　図版第八(3)

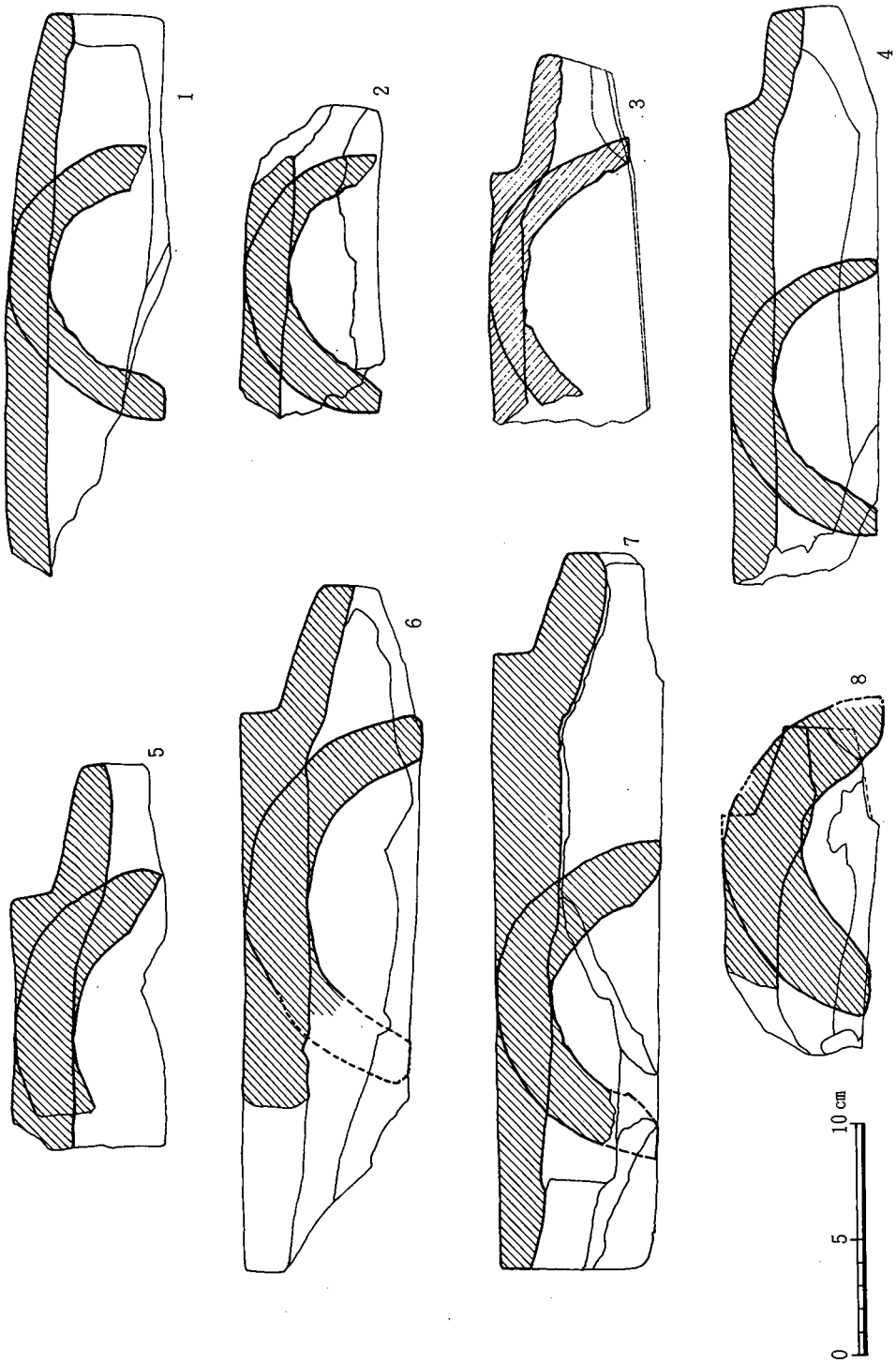
玉縁と丸瓦の接合部を残すのみで丸瓦前方部の大半を欠き、全長は不明。丸瓦後幅は13.5㎝、高さは6.７㎝を測り、丸瓦は半円痕状を呈す。厚味は平均1.５㎝を測り比較的薄手のつくりである。凸面には縦位に走る縄目叩きの痕跡が部分的に認められ、擦り消しは完全ではない。全体的に横方向に削られているが、一部縦方向の削り痕とヘラ先のくい込んだ凹が残る。玉縁凸面は横位に走る縄目叩きが、横方向のナデ消しに消されきれずに残っている。玉縁は丸瓦の接合点よりほぼ直線的に若干の俯向きをみせる。

側縁は内側に向けて面取りが施される。その幅は坦面1.１㎝に対し面取り幅も同じ1.１㎝を測り、何れも横ヘラ削りによるものである。玉縁は側縁が外側に向けて大きく面取りの施されるのが特徴である。また側縁外形線はやや上向き加減に弧を描いてから、斜上方へ直線的に伸び上る。

凹面には糸切り痕とともに15×11／㎠の布目が残るが、ほぼ中央を縦に走る凹線を境に半面には、布目はもちろん糸切り痕すら残らない。布目は丸瓦から玉縁まで連続しており、雛もほとんどついていない。胎土は１～２㎜程度の砂粒を多く含み、焼成は良好。薄灰褐色を呈す。

玉縁付丸瓦（法量不明　ＭＲ０５）　第14図(4)　図版第七(3)

比較的よくその全形を伺い知れる資料であるが全長は前方部を欠いているため不明。丸瓦後幅は12.8㎝、残存部前幅は12.8㎝、高さ6.２㎝を測り、前記同様丸瓦は半円柱状を呈す。厚味は



第 14 図　　丸　　瓦

平均1.9㎝を測り、やや薄手のつくりである。

凸面には縦位に走る縄目の叩きが、完全に擦り消されずに残っている。調整は縦方向にヘラ削り及びナデを施している。丸瓦の凸面後方はやや脹れあがっており、付け足した粘土を整形したものであることが知れる。また丸瓦からお縁接合点にかけては直角ではなく、やや角度を持って傾斜する。玉縁部は横ナデにより叩きは完全に擦り消されている。なお玉縁側縁の外形線はほぼ直線状に斜上方へ伸び上り、外側の面取りは幅広く行われている。

一方、側縁の面取りは内側に向けて幅広く、坦面1.2㎝に対し面取り幅1.8㎝を測る。

凹面には斜方向に弧を描く糸切り痕を11×11／㎠の布目が残り、丸瓦から玉縁にかけては布の皺が多い。胎土は若干の砂粒・小礫を含む。焼成は良好で、暗灰褐色を呈す。

玉縁付丸瓦（法量不明　ＭＲ０６）　　第14図(6)　図版第八(2)

厚味は平均2.5㎝を測り、やや厚手のつくりである。

凸面には側縁に対してやや斜行する。比較的粗い縄目が完全に擦り消されずに部分的に残っている。擦り消しは横方向のヘラ削りが主で、その痕跡が横方向に走る幾条もの筋となって残っている。ロクロ使用によるものであることが知れる。

玉縁も同じく横方向にヘラ削りされており、中央部は欠いているが滑らかな曲線を描いて俯向く。又、玉縁側縁の外形線は直線的に斜上方へ伸びあがり、外側の面取りもかすかではあるが、幅広く行われている。側縁は内側に向けて施される面取りが、玉縁接合部付近から徐々にその幅の広がりを見せる。しかし残存する坦面の幅は変わらず1.7㎝を測り、縦方向に通して走る約15本の平行線条痕がみられる。

凹面には9×10／㎠の布目がほぼ側縁に平行しており、糸切り痕は斜方向に弧を描く。中央部には横位に走る紐状圧痕をとどめる。胎土は小礫・砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は凸面黒灰褐色、凹面は赤茶褐色を呈す。

玉縁付丸瓦（全長30.8㎝　ＭＲ０７）　　第14図(7)　図版第八(1)

玉縁中程から丸瓦側縁中央にかけての部分は欠いてはいるが、ほとんど全形を伺い知れる。

全長は約1尺、丸瓦前幅は不明で後幅14.4㎝、前部高6.7㎝、後部高7.2㎝、厚味は平均して2.5㎝を測る。やや厚手のつくりである。

凸面は縄目の叩きをほとんど完全に擦り消しており、側縁近くの一部にかすかな痕粒を留める程度である。調整は縦方向のヘラ削り及びナデによるもので、ヘラ削りは縦方向に8単位に分割できる。全体的に滑らかな表面で、仕上げは出土個体中最も丁寧に施されていた。

玉縁は比較的短く、凸面は削りとナデによる調整。又、丸瓦後端と玉縁接合点との段は大きく玉縁は滑かな弧線を描いて俯向く。その角度は他に比して大きい。玉縁側縁の外形線は直線的に斜上方へ伸びるが、その角度は小さくなってきている。

側縁は幅の広い面取りが内側に向けて施され、坦面1.1㎝に対し面取り幅2.1㎝を測り、この

幅は玉縁接合部より前端部までほぼ平行して変わらない。前端縁は4.6㎝に及ぶ幅広い面取りが施されている。

凹面には側縁に対して斜行する糸切り痕と、丸瓦から玉縁まで連続して9×7／㎠の布目が残る。胎土は若干の小礫・砂粒を含み、焼成は良好。色調は暗灰褐色を呈し部分的につやが残る。

玉縁付丸瓦（法量不明　ＭＲ０８）　第14図(5)　図版第八(4)

玉縁と丸瓦後部を残す。後幅は14.2㎝、後部高6.9㎝を測る。厚味は平均2.1㎝である。

凸面は横方向にヘラ削りを施し、凹面にはやや粗い5×6／㎠の布目と糸切り痕が残る。側縁は内側に向けて幅の広い面取りが施され坦面1.1㎝に対し面取り幅1.9㎝を測る。丸瓦凸面後端から玉縁の接合点にかけてはほぼ直角で、玉縁の付け根もヘラによる整形と思われ明確な段を有する。玉縁はそこからほぼ直線状に、大きく俯向き、先端に至ってやや上方に反り返る。側縁外側の面取りは施されていない。胎土は砂粒を含むが良撰で、焼成は硬質。色調は明灰褐色を呈す。

平　瓦

今回の出土遺物の大半を占めるのがこの平瓦片である。しかしながら全形を留めるような遺物は皆無であり、実測した点数もごくわずかである。ゆえに今回は法量・形態等による詳しい分析を行っていないが、ただ通観したところではそのほとんどが第Ⅲ期文字平瓦と同傾向を示すものであり、これに次いで第Ⅱ期の瓦が占める。第Ⅱ期に属する平瓦については、第Ⅱ期軒平瓦の調整法等との合致からこれに含めることにしたが、第Ⅲ期と第Ⅳ期以降との間には何等明確な分類基準があるわけではない。ただ文字平瓦と同傾向を示すことで一轄して第Ⅲ期に含めておくものである。以下第Ⅰ期・Ⅱ期については特徴ある個体をとりあげ、第Ⅲ期については３つのグループに分けて概観することにする。実測図及び表裏面の拓影は第Ⅱ期平瓦を中心に掲載し、同期ＨＲ０７については実測図と拓影のみを掲載して本文は省略した。

ＨＲ０１　第15図　図版第九(2)

両端縁を欠き、一部の側縁を残すだけの断片である。桶巻きつくりによるもので、分割側面は弧の中心を指す。厚さ2.7㎝を測る。凸面はすり消しが行われていて叩き目は残らない、横方向に線条痕が認められすり消しが横方向に、それも粘土を全面的に削り取るくらいに強く行われている。しかし表面には凹凸が目立ち、粗雑な仕上げである。凹面には7×9／㎠の布目が残るが、やはりすり消しが行われている。側縁は凹面側において、面取りというほどのものではないが撫でる程度に角を取っている。胎土はキメが細く精緻であるが、中に5㎜程度の小礫を含む。焼成は軟質。色調は白黄色を呈す。

ＨＲ０２　第16図(1)　図版第十(1)

全長は不明。狭弦19.8㎝、後弧高3.9㎝、厚味1.7㎝を測る。薄手のつくりである。凸面にははなれ砂が付着しており、その上を素板の叩き板で叩いたと思われる縦方向の細い板木目が残っている。凹面にもやはり一面にはなれ砂が付着している。また縦方向に木型の痕跡のような凹み

が数条みられる。側縁はヘラ削りを施し、坦面は垂直方向を指し、凹面側縁部は面取りというほどのものではないが、軽く撫でて丸味を持たせている。狭端縁は内方向に角度を持たせてヘラ削りし、面取りは行っていない。胎土は小礫、砂粒を多く含む。焼成やや軟質。凸面白灰褐色、凹面は薄灰褐色を呈す。

ＨＲ０３　　第16図(2)　図版第十(2)

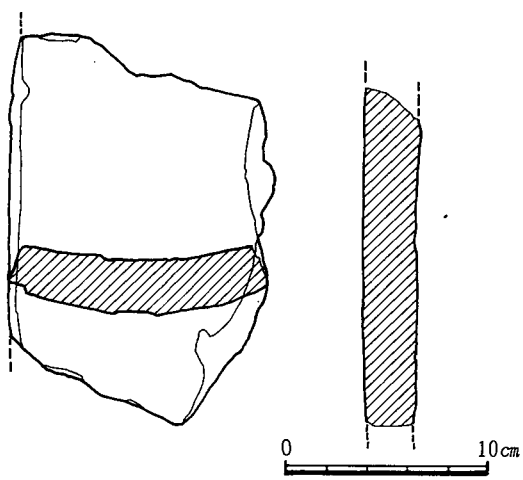
厚味2.3㎝を測る。凸面にははなれ砂が一面に付着しており、糸切り痕とともにＨＲ０２と同様の素板による叩き目が残る。凹面にはかない深い糸切り痕が、側縁に対して斜方向に弧を描く。一面にやや粗いはなれ砂が付着する。側縁はナデによる調整を施し、凹面側縁部は丸味をもたせておさめている。狭端縁は幅1.5㎝の面取りを施す。胎土は小礫・砂粒を含み、焼成は良好。色調は凸面白灰褐色、凹面薄灰褐色を呈す。

ＨＲ０４　　第16図(3)　図版第十(3)

全長は不明。狭弦19.5㎝、後弧高4.3㎝、厚味2.9㎝を測る。やや厚手のつくりである。凸面には粗い縄目の叩きが側縁に平行して明瞭に残る。叩きは深く、恐らく平瓦の全長を上回る叩き板で叩いたと思われ、縄目が縦に通して走る。凹面は縦方向に荒いヘラ削りが施され、布目は完全に消されている。側縁はヘラ削りのあとナデを施し、丁寧に仕上げている。狭端縁は幅2.9㎝を測るやや広い面取りが施されている。胎土はキメが細く良撰で、焼成は硬質。薄灰褐色を呈す。

ＨＲ０５　　第16図(4)　図版第十一(1)

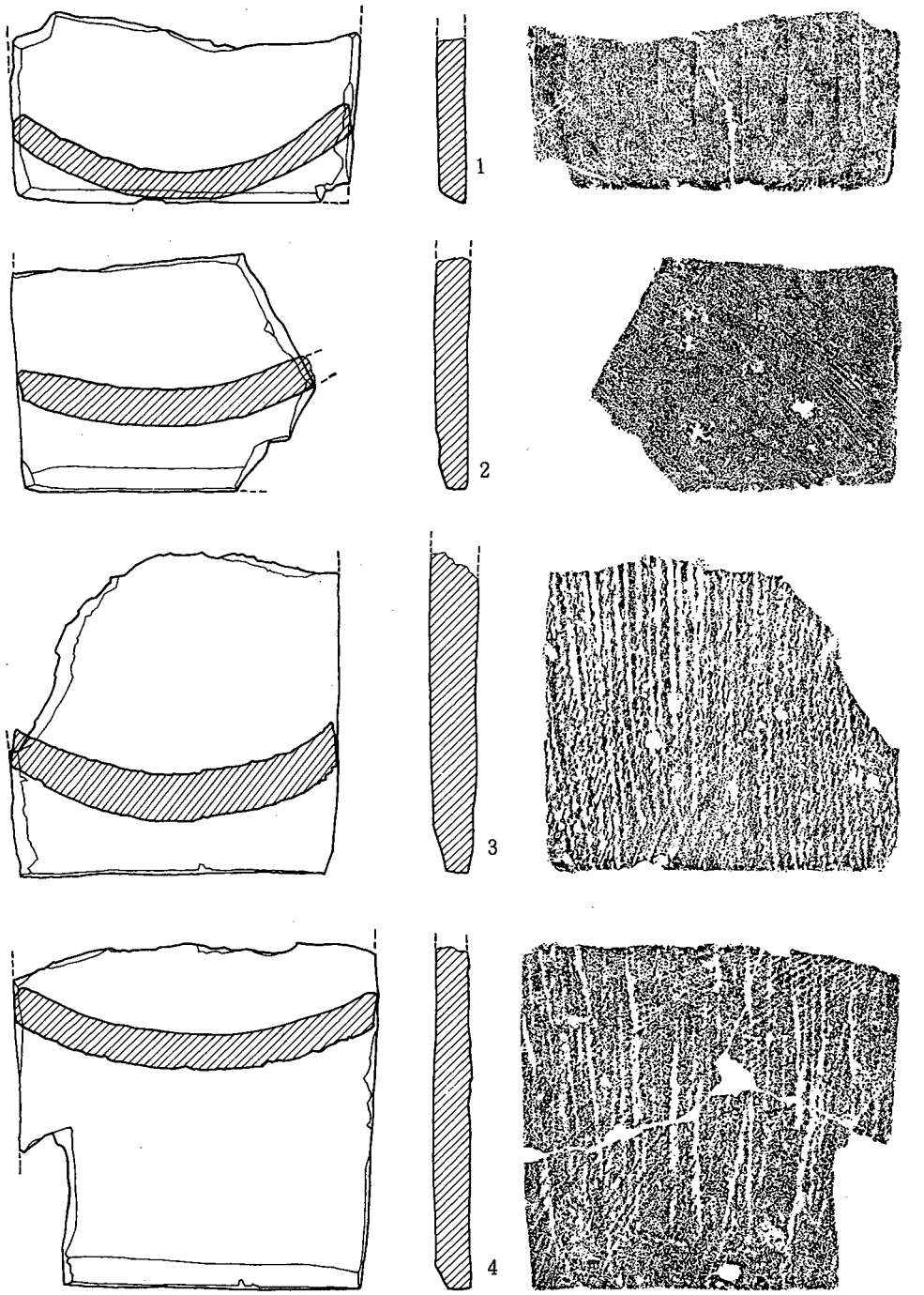
全長は不明。狭弦21.4㎝、後弧高3.4㎝、厚味2.2㎝を測る。凸面にはやや目が粗く不揃いな縄目の叩きが側縁に平行して残る。一面にはなれ砂が付着しており、側縁に対して弧を描く糸切り痕もみとめられる。はなれ砂は２～３㎜程度の小礫を多く含むものである。凹面には部分的に布目或いは糸切り痕が残るが、ヘラ削り及びナデを施してすり消している。側縁は削り及びナデにより丁寧な調整を施し、特に面取りは施されていないが凹面側縁部を軽くナデて丸味を持たせている。木型からはみ出した粘土は側縁に折り返している。狭端縁は1.4㎝の幅の面取りを施す。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや硬質。色調は黄灰褐色を呈す。



第15図　平　瓦

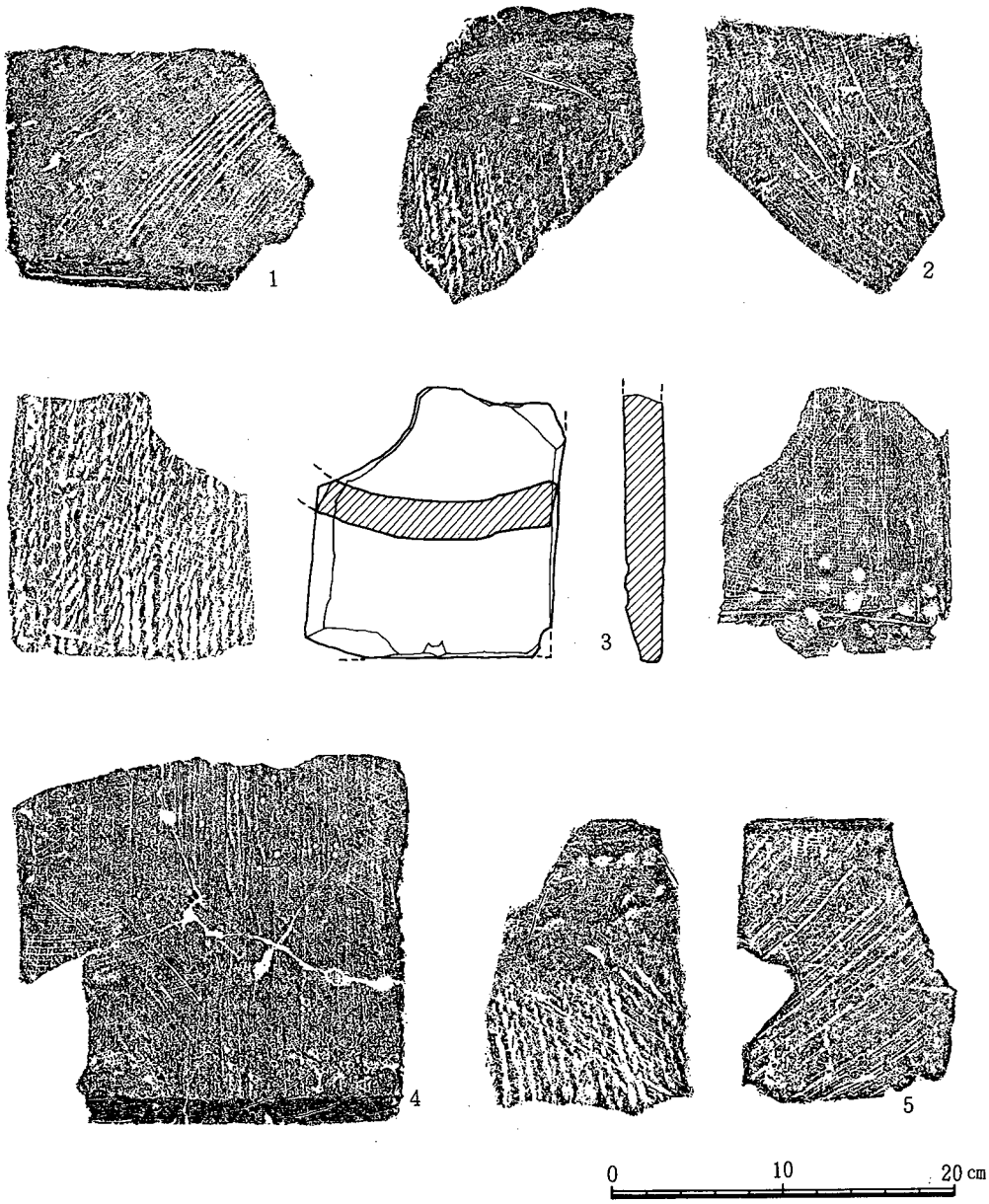
ＨＲ０６　　第18図　図版第九(1)

全長30.3㎝、狭弦21.3㎝、復原広弦23㎝を測り、縦１尺、横幅狭弦７寸、広弦７寸５分の平瓦である。凸面は前方部半面に比較的粗い縄目の叩きを残す。後方部半面



第16図　平　瓦

（第17図(1)及び(4)は、それぞれ第16図(2)及び(4)に対応するものである。
本図の(3)は他と同様に第Ⅱ期に属するもので本文は省略した。
尚、本図(2)は軒平瓦ＮＨ０１（第12図(1)）で、本図(5)は軒平瓦ＮＨ０２（第12図(2)）
の平瓦部の拓影である。これにより双方が同期に属することがわかる。）



第 17 図　平　　瓦

には側縁に対して斜方向に弧を描く糸切り痕を残すのみで、叩き目はすり消されてほとんど残っていない。縄目叩きを残す部分には5㎜以上の小礫を含む粗いはなれ砂が付着している。

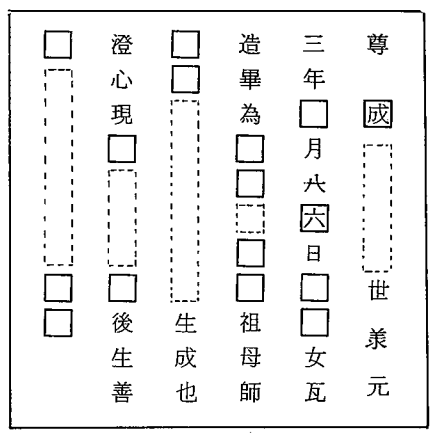
凹面には縦書き6行にわたって文字が刻まれている。文字はヘラ書きされたもので、右利きの筆跡である。表面には凸面同様に小礫を多く含む粗いはなれ砂が一面に付着している。前方部半面は付着した炭素の残りがよく灰褐色を呈するのに対して、後方部半面はやや色褪せのした薄灰褐色を呈す。狭端縁は横ヘラ削りによる幅約2.4㎝のやや広い面取りが施されており、残存坦面は1.0㎝を測る。又、側縁・広端縁も横ヘラ削りによる調整で、狭端縁面取り部同様の横位に走る線条痕が認められる。しかし、枠板からはみ出した凹面の粘土はなおその上から側縁に折り返されており、このため凹面側端部はやや丸味を帯びるが、側縁には粘土の付着した分だけ若干の段がつく。胎土は砂粒を含むが良撰で、焼成はやや軟質。凸面の色調は薄灰茶褐色を呈す。

因みに復原広端部弧高2.2㎝、狭端部弧高2.0㎝、狭端部厚2.05㎝、広端部厚2.15㎝を測る。

銘文については瓦自体が完存するものではなく、又浅刻によって判読不可能な文字もあってその全容を明らかにすることはできないが、残存部については凡そ次の様に読むことができた。「尊成」は後鳥羽天皇の名前であると考えられ「タカヒラ」と訓む。年号を表わすのに天皇の名前を冠する書き方は他にも行われたらしく、本瓦もその一つであると思われる。恐らく「尊成（御宇）世」とつづくものであろう。承元3（1209）年は正しくは土御門天皇の御世であるが、又後鳥羽上皇による院政が行われていた時期でもあり、こうした書き方が行われたものかもしれない。「羕元三年」2月或いは3月の「六（六）日」である。つづく文面の示す内容はおよそ、「祖母・師（長）の（極楽浄土）への生成（並びに）澄心（人名）の現（世安穏）後生善（處）の為、女瓦造畢」由を述べた願文であり、寄進瓦であることを示している。

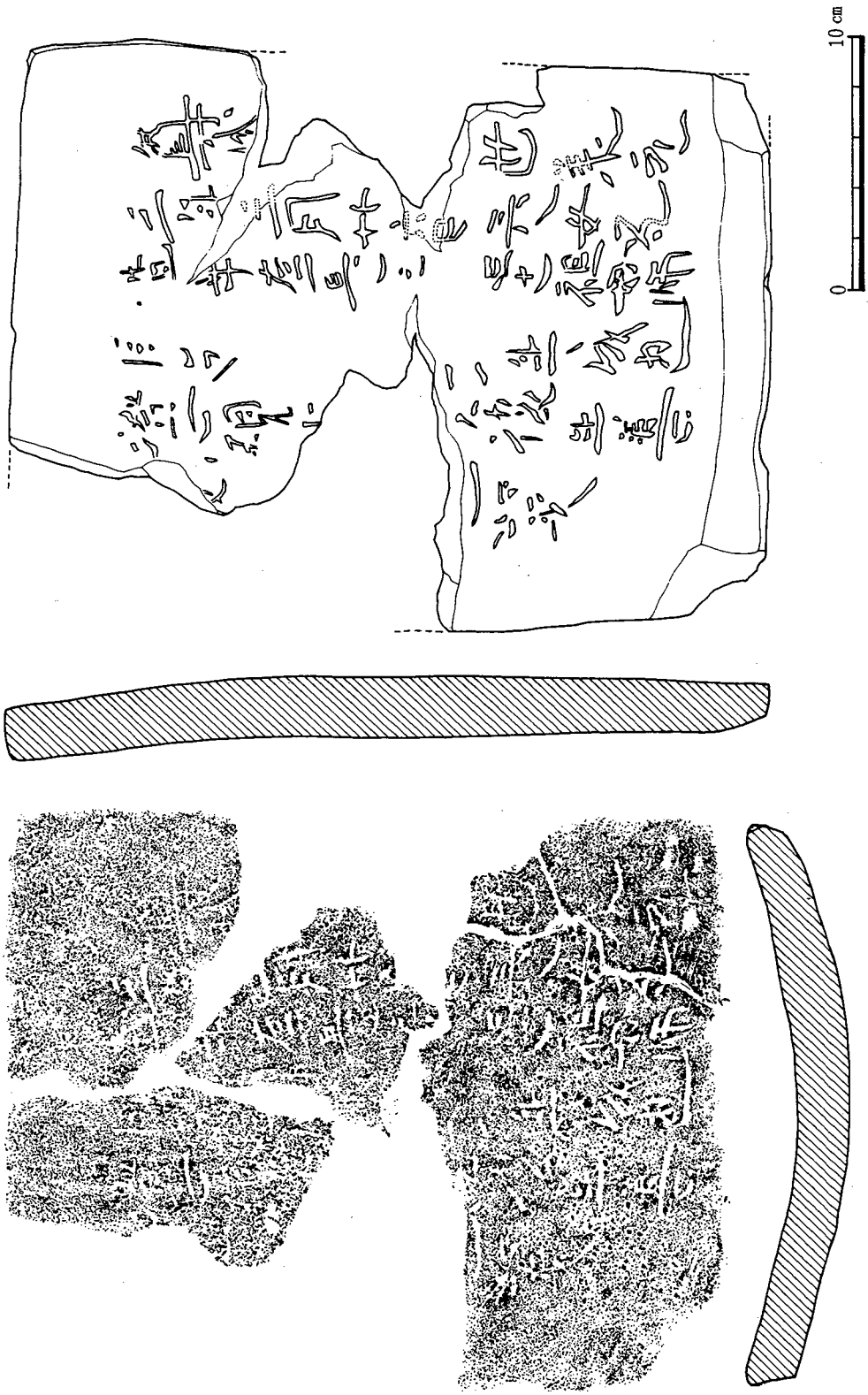
本書における瓦の時期分類は総て、この文字平瓦を基準にするものであり、これを第Ⅲ期とした。絶対年代の知り得る資料として注目される。

第Ⅲ－A　ＨＲ０６と全く同傾向を示す瓦である。凸面には糸切り痕とともに縄目の叩きを部分的に残し、凹凸両面にはなれ砂が付着する。狭端部においては強いヘラ削りによってやや幅広の面取りが行われている。量的には少なく、数点を数えるのみであった。



第Ⅲ－B　凸面には一面に砂が付着するが、糸切り痕をかすかに残すのみで叩き目は一切認められない。凹面はすり消しが行われているものの、布目の残るのが特徴である。胎土・焼成は様々である。

第Ⅲ－C図版第十一(3)　凹凸両面が無文であり、両面ともに砂が付着するのが特徴である。しかも中には



第 18 図　文 字 平 瓦 （HR06）

付着する砂がはなれ砂というよりも、調整後に改めて意識的にまぶしたのではないかと考えられる様なものもあり、砂の付着が極めて顕著である。狭端部においてはやや幅のせまい面取りが行われ、ヘラ削りのあとナデを施し滑らかにおさめている。胎土・焼成は様々であり、量的にはこの種類が大半を占める。

なお、第Ⅲ－Cについてはこれを更に細く分類することも可能であろうが、今回はここまでに留めておく。以上で平瓦についての観察を終える。

その他の遺物

ここでは特に17点を取り挙げて解説を付すが、もちろんこれが総てではない。しかし、今回の発掘に伴う屋瓦以外の遺物の出土は極めて少なく、且つそれらのほとんどすべてが細片ばかりであった。完形で出土したのはわずかに瓦器碗一点と、土師質小皿２点ぐらいである。

なおここには取り挙げなかったが、これらの他に陶磁器類では近世から近代にかけての染付や伊万里焼の破片が出土している。

滑石製鍋　（復原口径 21.5㎝）　第20図　図版第十二(7)　直立する口縁を有し、口縁端部は平坦に終わる。やや幅が狭く三角状に尖るつばが周囲をめぐる。仕上げは極めて丁寧に行われていて、内外面ともにキズは多いが滑らかな肌を有す。尚つばより下方には煤が付着しており黒灰色を呈す。それ以外は淡灰茶褐色である。形態的に著しい特徴を有し、残存部で一ケ所口縁及びつばを内側に軽くしぼっている。全体で何ケ所に及ぶのかは不明であるが、つば及び口頸部外壁の凹む分だけ内壁は脹んでいる。機能性よりも形態美を追求したものと考える。

須恵質擂鉢　（復原口径 28.4㎝）　第20図(3)　図版第十二(4)　直線的に外上方に伸びる体部と、やや肥厚して上方へ突出する口縁部からなる。口縁上端は丸味を持たせておさめており外面の口縁と体部界は明確な段を有する。口縁部内外面はナデ調整。体部下半はヘラ削りの後、櫛状工具により横方向の調整を施している。体部内面には横方向に刷毛目、縦方向の擂し目が一部残っている。胎土はやや砂っぽく、色調は内外面ともに明灰色を呈す。

瓦質羽釜　（復原口径 22.8㎝）　第12図(4)　やや内傾する口頸部は上端で内外両方向へ拡張し、平坦な口縁端面を有する。つばはやや下向き加減で、断面は長方形状に角を張る。口頸部内外面、つばはともに横ナデ調整。繊細な仕上げである。胎土は１㎜程度の砂礫を若干含むが良撰。頸部外面は白灰褐色、つば裏面は黒灰茶褐色。内面は淡灰色を呈す。

瓦質羽釜　（復原口 20.8㎝）　第11図(5)　内傾する頸部を有し、口縁端部はやや内上方へ斜向して平坦におさめている。つばは剥離。体部内外面ともに横ナデ調整。胎土は１～２㎜程度の砂礫を含み、内外面ともに黒灰色を呈す。

土師質羽釜　（復原口径 ――）　第12図(7)　口縁部を欠いているため口径は不明。残存頸部には明確な２段を有する。つばは上面中央がやや凹み、外端部は外上方へつまみあげたように突出する。口頸部及びつばは横ナデ調整。内面は櫛状工具による横方向の調整痕。胎土はやや砂っぽい

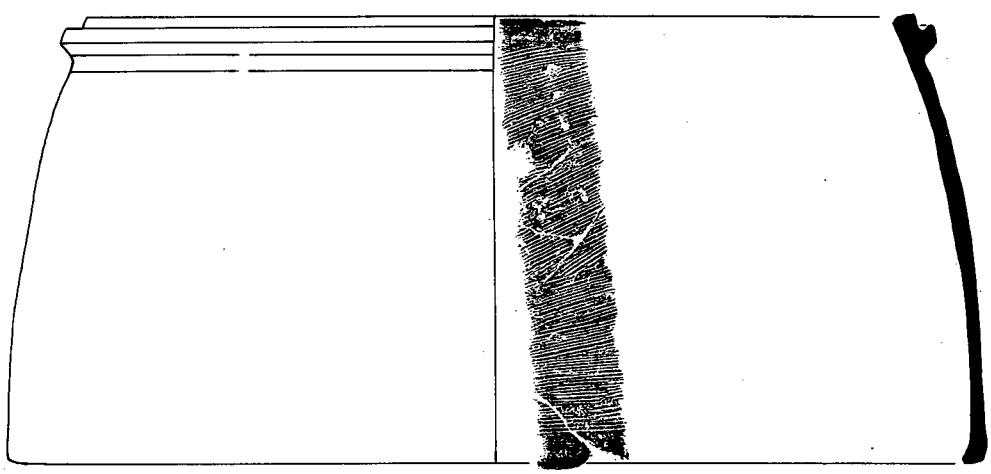
が良撰。つば上面及び内面は濃灰茶褐色を呈し、つば裏面及び胴部には煤が付着する。

瓦質井筒　（復原口径 54.0㎝）　第19図　図版第十二(8)　総高は 29.7㎝を測る。肉厚の底部からほぼ直立気味に立ちあがり、器壁の薄くなる中央あたりより口縁にかけて内傾する外形線は、全体的にゆたかな曲線を描く。口縁上端は僅かに肥厚し、端部はヘラ削りにより平坦におさめる。口縁部に付くつば状突帯は斜方向の立ちあがりを見せ、上面外端が上方に向けて著しく突出する。つまり断面形はほぼ正方形の右上隅をつまみあげたような形を呈する。外面は全面的にナデによる調整で、若干の凹凸がみられる。内面は横或いは斜方向に走る粗い刷毛目による調整が施され、上下端部のみナデを施す。底部は丁寧なヘラ削りにより平坦におさめている。胎土は１～２㎜程度の小礫、砂粒を若干含む。色調は内外面ともに黒褐色を呈す。用途は恐らく組み合わせ式の井筒であろうと思われる。

土師質甕　（復原口径 30.0㎝）　第20図(2)　図版第十二(3)　口径は「く」の字状に外方向にひらき、口縁端は下方に突出して平坦におさめるが、内方向へも若干の尖りを見せる。器壁は頸部でやや厚くなるが体部は比較的薄く、残存する体部下方に退化した貼り付け突帯を巡らす。この突帯は幅 1.5、高さ 0.2 ㎝を測るもので、貼り付けた粘土を、揃えた２本の指で撫で回して仕上げたものと思われる。外面は全面横ナデによる調整。内面は風化が著しく不明。胎土は小礫・砂粒を多く含む。色調は淡赤茶褐色を呈す。

瀬戸碗　第20図(15)　灰釉系統の瀬戸碗である。高台径 4.7 ㎝を測る底部のみの破片。釉は高台畳付を除く全面に施す。胎土はやや砂っぽい白黄色で、全面には細かな貫入が夥しい。内面見込みには小さな隆起（丁度兜巾を逆にした形）のあるのが特徴である。

染　付　第20図(14)　中国製の染付であるが器形は不明。高台径 5.5 ㎝を測る底部のみの破片である。内面見込みには濃技法で描かれた内容不明の模様がみられる。高台内面に釉は施されて



第19図　井　筒

0　10　20㎝

いない。又高台畳付の幅は広く1.2㎝を測るが、内側角を広く面取りしているため実質的な畳付は0.2㎝である。なお面取り部分には放射線上に走るヘラ削りらしき痕跡を認むる。胎土は細密で白色である。貫入はみられず、表面は充分な光沢を保っている。

青　磁　碗　　第20図⑯　高台径4.5㎝を測る底部のみの破片である。高台外面は一部赤茶褐色を呈し、鉄釉と考えられる。高台内部は無釉。兜巾が明瞭に残っており、また内面見込みには重ね焼きの痕跡を残す。胎土は細密で灰色を呈す。中国製のもので14～15世紀頃のものである。

青磁小皿　（復原口径11.2㎝）　第20図⑩　底部を欠いた破片である。体部は内弯気味に立ちあがり、口縁部がやや外反する。口縁端は薄く尖りぎみにおわる。比較的薄手のつくりで、貫入はみられない。胎土は緻密である。中国製で、13～14世紀頃のものである。

蛸　壷　（復原口径11.6㎝）　第20図⑬　口縁部はほぼ直立し、肥厚する口縁は所謂玉縁口縁となる。頸部は指圧整形の痕跡が著しく、内外面ともに凹凸が夥しい。おそらく握った手の指先で頸部を挟み整形したものであろう。胎土は砂粒を含むが良撰。白黄色を呈す。

瓦質小皿　（復原口径9.4㎝）　第20図(9)　体部から口縁部にかけて表面がわずかに剥離しており、ひずみがみられる。底部は凹凸が夥しく、全体的に簡略なつくりである。胎土は1㎜前後の砂粒を多く含み、色調は黒灰色を呈す。

土師質小皿　（復原口径6.8㎝）　第20図⑰　立ちあがりをみせる口縁内外面は横ナデ調整を施す。底部外面は軽い削りを施し、指頭圧痕が残る。底部内面は指先によるナデ。口縁部にはひずみがみられる。胎土は1㎜前後の砂礫を若干含むが良撰。赤乳色を呈す。

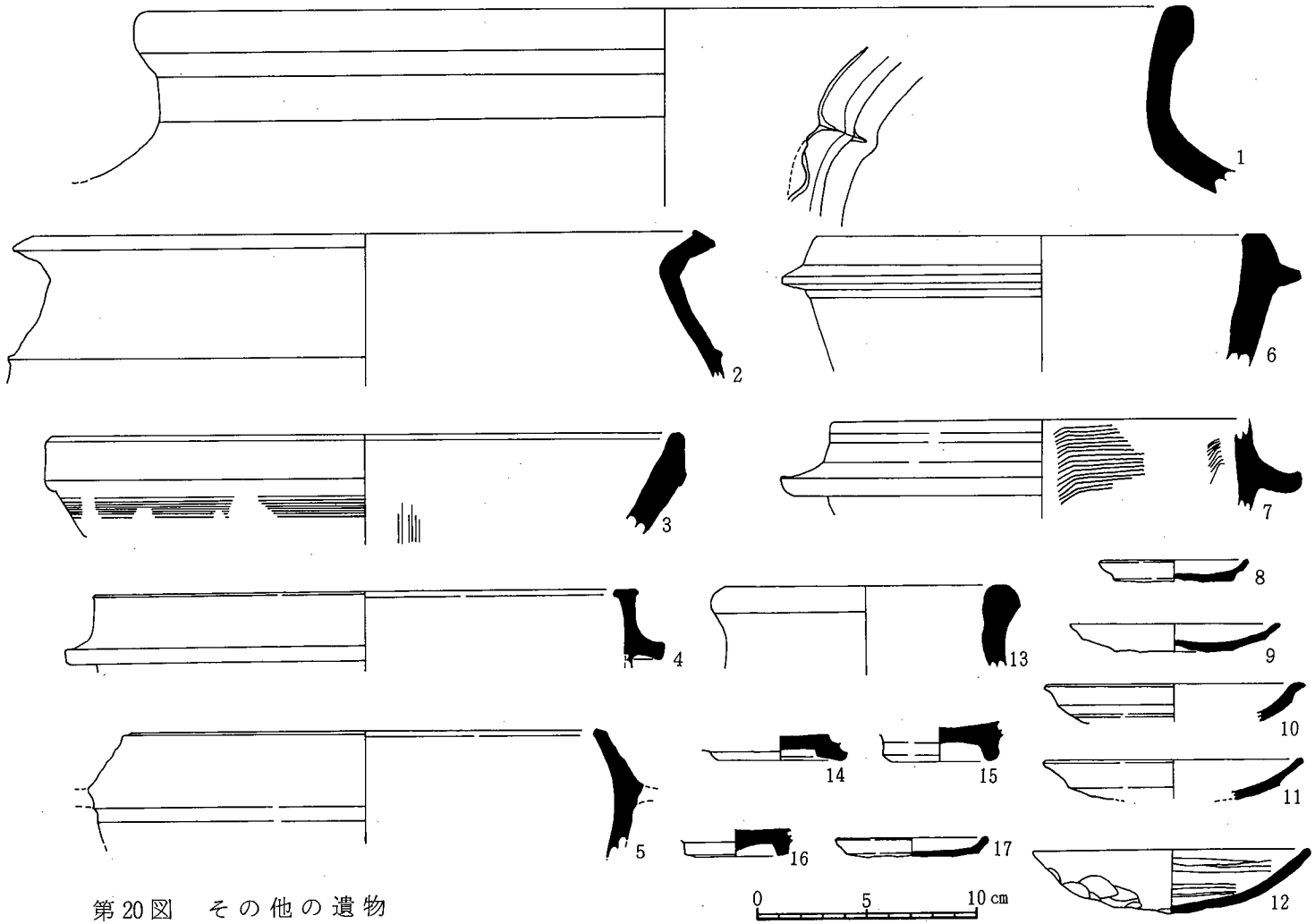
土師質小皿　（復原口径約6.6㎝）　第20図(8)　前記とほぼ同様である。

瓦　器　皿　（復原口径11.6㎝）　第20図⑪　平底で体部はやや「く」の字状に外反し、口縁端部を丸くおさめている。外面は指先整形に軽い削りを施す。内面には刷毛目。胎土は1㎜前後の砂粒を含む。色調は全体的には青灰褐色を呈す。

瓦　器　碗　（口径12.6㎝、器高2.8㎝）　第20図⑫　図版第十二(2)　外上方にのびる体部を有し、口縁端部を丸くおさめる。体部外面中央より下半には指頭圧痕が残る。底部には退化した貼り付け高台が付くが、遺物の座りは悪い。内面調整はヘラ磨きによる。胎土は砂粒を含むが良撰。色調は内外面ともに青灰褐色を呈す。

須恵質水甕　（復原口径48㎝）　第20図(1)　口縁はやや外反し、端部平坦面を丸味を持たせておさめる。丁度断面形は長方形の四隅を丸く面取りした形を呈し、所謂玉縁口縁となる。頸部器壁はやや薄く、外形線はほぼ直線状にのび、体部界で再び肥厚する。胎土中には例外的に1.6㎝程度の礫を含む他、3～4㎜程度の小礫を多く含み、色調は内外面ともに明灰褐色を呈す。

これらの他に、著しく銹化した「元祐通寶」（図版第十二(1)）一点や土錘三点等が出土している。又陶磁器類も含めて更に細片に及ぶ遺物は数多いがここでは割愛し、以上で出土遺物についての概説及び観察を終える。



第20図　その他の遺物

考　　察

1. 分　　類

先にも記したが、今回は出土屋瓦全体を７期に分類した。これは軒丸瓦と軒平瓦の４型式の組み合わせを、ＨＲ０６の文字平瓦を基準に時代順に配列し、更に丸瓦・平瓦を加えて全体を７期に分けたものである。各々基準となるのは第Ⅱ期ＮＭ０１－ＮＨ０１・０２、第Ⅲ期ＮＭ０２－ＮＨ０３－ＨＲ０６、第Ⅵ期ＮＭ０３－ＮＨ１０、第Ⅴ期ＮＭ０６－ＮＨ１１、第Ⅵ期ＭＲ06・０７、第Ⅶ期ＮＭ０７である。なお時期分類については別表を参照されたい。以下各期について略述しておく。

第Ⅰ期　　第Ⅱ期に先行する遺物を一轄して第Ⅰ期に含めた。数量的にもそう多くはなく、必らずしも第Ⅱ期に連続するものではない。奈良時代末～平安時代前期と考えられる行基式丸瓦ＭＲ０１・０２・０３の他、ＨＲ０１や第21図に示す平瓦片などは確実に奈良時代にまで遡るものでありやや範囲は広くなるが、奈良時代～平安時代中期として捉えられるものである。

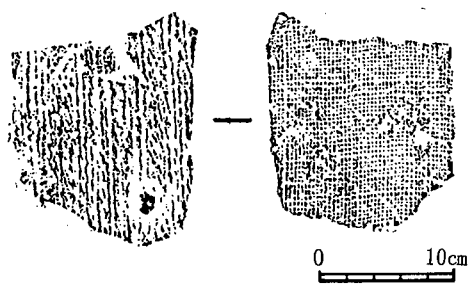
第Ⅱ期　　ＮＨ０１－ＮＨ０１・０２を中心に、第Ⅲ期にほぼ連続して先行するものである。平瓦ではＨＲ０２・０３・０４・０５を含み、縄目叩きが明瞭に残るもの或いは弧高が高く素板の叩き目の残るのが特徴である。丸瓦ではＭＲ０４がこれに含まれる。平安時代末期として捉えられるものである。

第Ⅲ期　　承元３年の銘を有すＨＲ０６と、ＮＭ０２－ＮＨ０３の組み合わせが中心となり全体の基準をなす。ＮＨ０４～０９の連珠文軒平瓦は総てがこれに含まれる。平瓦片の多くも第ⅢＡ～第ⅢＣの何れかの特徴を伴ってここに含まれるもので、出土屋瓦の大半を包摂する時期である。鎌倉時代初期として捉えられるものである。

第Ⅳ期　　ＮＭ０３・０４とＮＨ１０の組み合わせにより設定される時期で、この組み合わせ形式に伴うと考えられる丸瓦・平瓦は認められなかった。第Ⅲ期につづく鎌倉時代前中期として捉えられるものである。

第Ⅴ期　ＮＭ０５・０６とＮＨ１１の組み合わせを有し、これにＭＲ０５が伴う。第Ⅴ期に含まれる個体はこの４点のみである。第Ⅳ期に次ぎ、第Ⅵ期に先行するものとして鎌倉時代中後期に比定されるものである。

第Ⅵ期　　ＭＲ０６・０７・０８の他、特に丸瓦のみによって設定される時期であり、これに伴うと考えられる軒丸瓦・軒平瓦等はみとめられなかった。また丸瓦の中では更に細く分ければ幾分時代の開きはでてくるものの、全体的には室町時代として一轄に捉えられるものである。

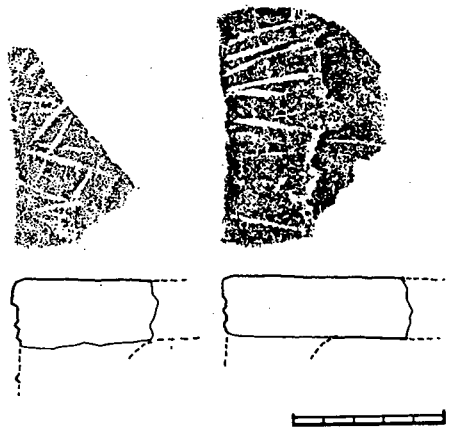


第21図　平　瓦

第Ⅶ期　　ＮＨ０７によって設定されるものである。他の軒丸瓦とは明らかな性質の相異を見せ、安土桃山時代として捉えられるものである。なお確実に第Ⅶ期に含められるものは、NM07のただ一点のみであった。

2.　軒平瓦の接合技法　―瓦当と平瓦の結合―

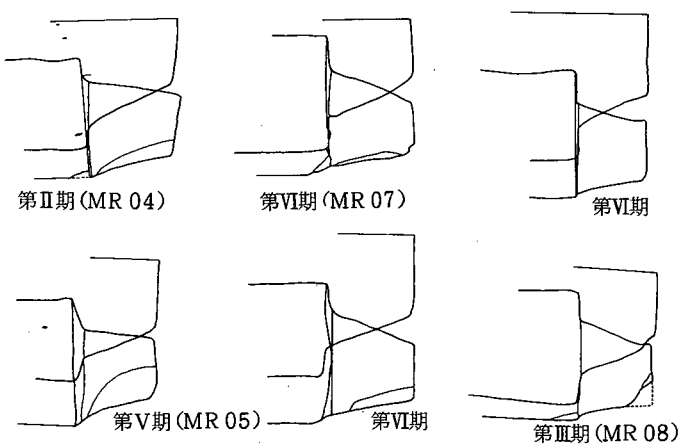
遺物整理の段階において、瓦当の剥離した軒平瓦断片等からそのおよその接合技法を伺い知ることができた。軒平瓦の製作過程における瓦当と平瓦の接合方法は、今回の出土遺物に関する限りその総てが次に示す要領に従ったものと言える。つまり、平瓦広端部凸面にあらかじめ粘土を貼り付けて厚くし、瓦当を作製。文様面を平らに整形して後、笵型を当てて瓦当文様を飾る方法である。そしてこの場合、平瓦と瓦当作製用粘土との接着を効率よくするため、平瓦の接合面に「きざみ」を入れる工夫が行われる。今回は２例を確認したので右に示しておく。なお「きざみ」はヘラ状工具によるもので、瓦当面より約５㎝幅で、Ｘ状あるいは八字状に刻されている。深さは２㎜を起えるものはなく、極めて浅いものであるということができる。



第22図　平瓦の接合技法

3.　丸瓦玉縁の傾向

玉縁付丸瓦については遺物観察で取りあげた他にも玉縁部のおよそ復原できる個体を選んでそれぞれ略実測し図面を作製した。比較資料に乏しく、特に時代の変遷に伴う顕著な変化は認められなかったが、それでも指摘されるべき傾向について２～３点掲げておく。



第23図　丸瓦玉縁の傾向　Ｓ＝½

まずは一般的に言われる傾斜角度の問題である。これは第Ⅱ期及び第Ⅴ期のＭＲ０４とＭＲ０５とではその差は微妙であるが、第Ⅵ期に入っては確実に大きく俯向く傾向を示す。又、ＭＲ０４とＭＲ０５の比較で言えば、玉縁の長さが前者に対して後者は短く、最終調整は後者の方がより丁寧であるということができる。

或いは第Ⅵ期に属する丸瓦においては玉縁先端部が上方に反り返る例が数点みられたのと、玉

縁傾斜線がゆるやかな弧線を呈するようになるのが特徴的である。

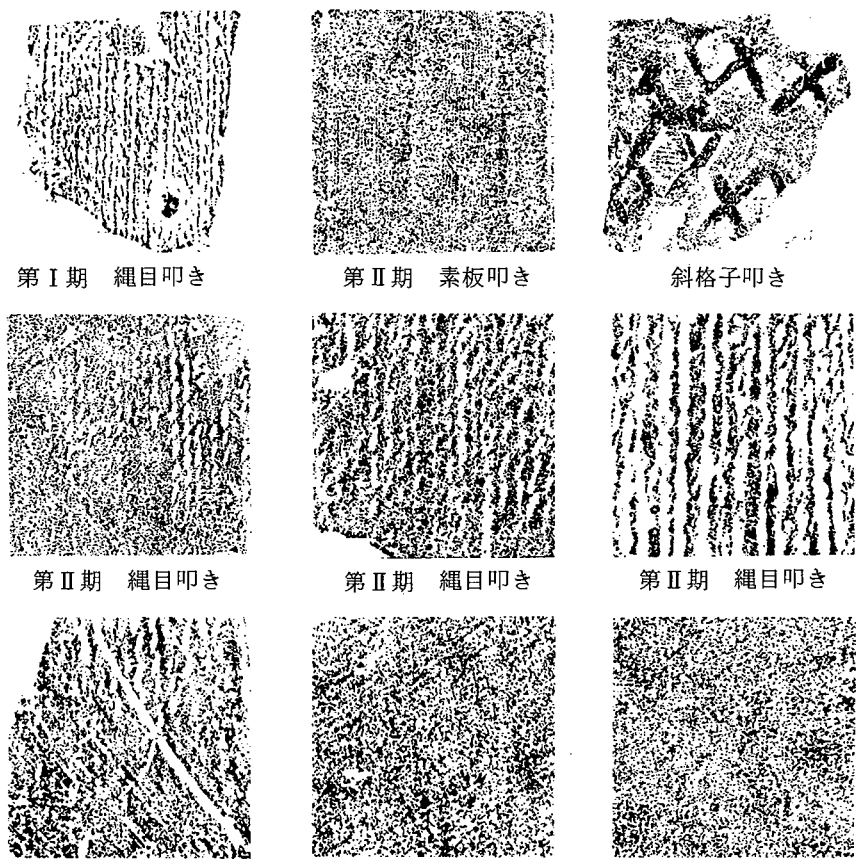
次に玉縁側縁の面取りである。第Ⅱ期及びⅤ期では、玉縁側縁外側にて幅の広い面取りが行われているのに対して、第Ⅵ期中の例ではほとんどこの種の面取りはみられない。ただ第Ⅵ期中でも鎌倉時代末期～室町時代初期と考えられるものについては、ごく薄く粘土を削り取る程度の面取りがみられた。この種の面取りの変化にも、或いは何等かの必然性が考えられるかもしれない。

4. 叩　き　瓦

今回の出土平瓦は、その大半が凸面の叩き目をすり消した「すり消し瓦」である。叩き目を残す「叩き瓦」は第Ⅱ期に属する平瓦において認められるが、数量的にはそう多くはない。

叩き文はその種類によって縄目叩き・素板叩き・斜格子叩きに分けることができ、縄目叩きはまた粗密によっても分けることができる。なお斜格子叩きを有する瓦はごく小片であり、性格が判然としないところからどの時期に含められるべきものかは不明である。

以下に各々の拓影を示しておく。



第 24 図　平 瓦 凸 面 調 整 S＝½

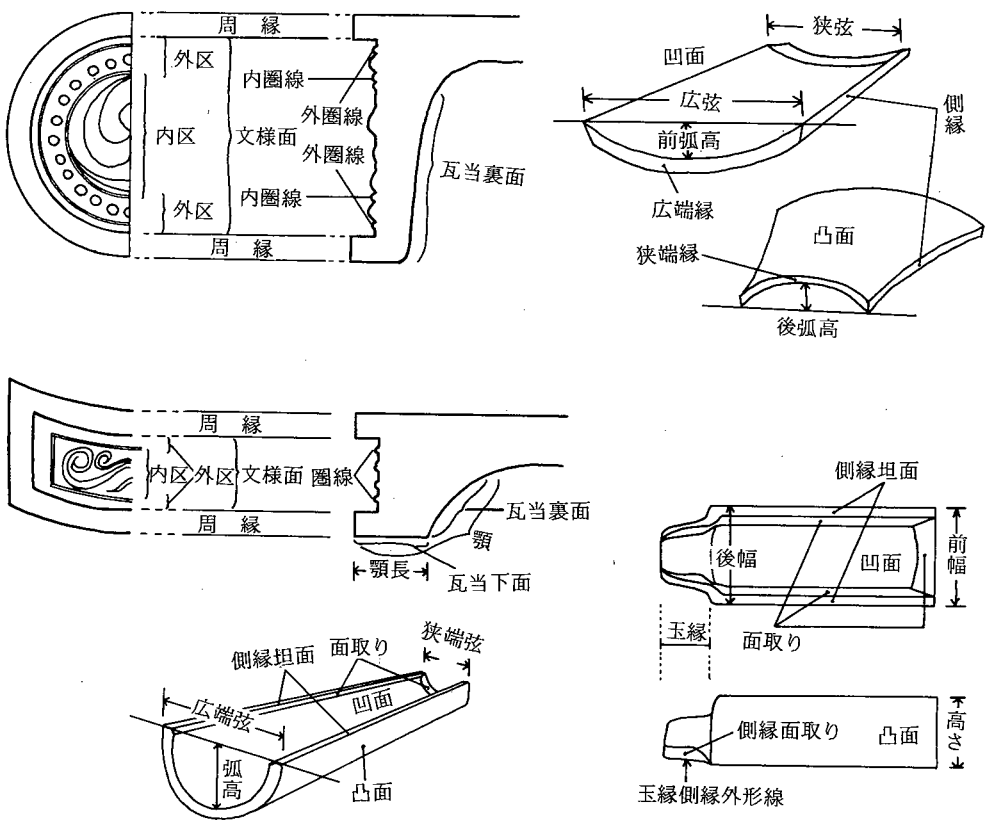
3. ま と め

今回は調査期間中にいろんな制約を加えられ、十分な調査ができなかった。しかしそれでもいくつかの知見を得ることができた。

今回の調査地は78年度調査地の北隣りにあたるが出土遺物の割合は前回とは比べものにならず瓦の出土量が多く9割以上を占めるものと思われる。これらのものはかなりの時代幅をもっているが、平安時代末から鎌倉時代前期のもの（承元3年銘の文字瓦を中心とする時代）が一番多い様である。

調査地北側は数10㎝低くなっていたらしく、時期は限定しえないが、室町時代頃に地上げされた可能性がある。

最後に調査地には堂ノ前という小字名がのこり、多数の瓦の出土があったという事実から、中世末期に新井村から貝塚寺内町へ移ったという尊光寺をあてるわけではないが、寺院跡の存在が考慮される。地下に眠る文字瓦の残片を始め、遺跡が今後の調査により明らかにしてくれるであろう。



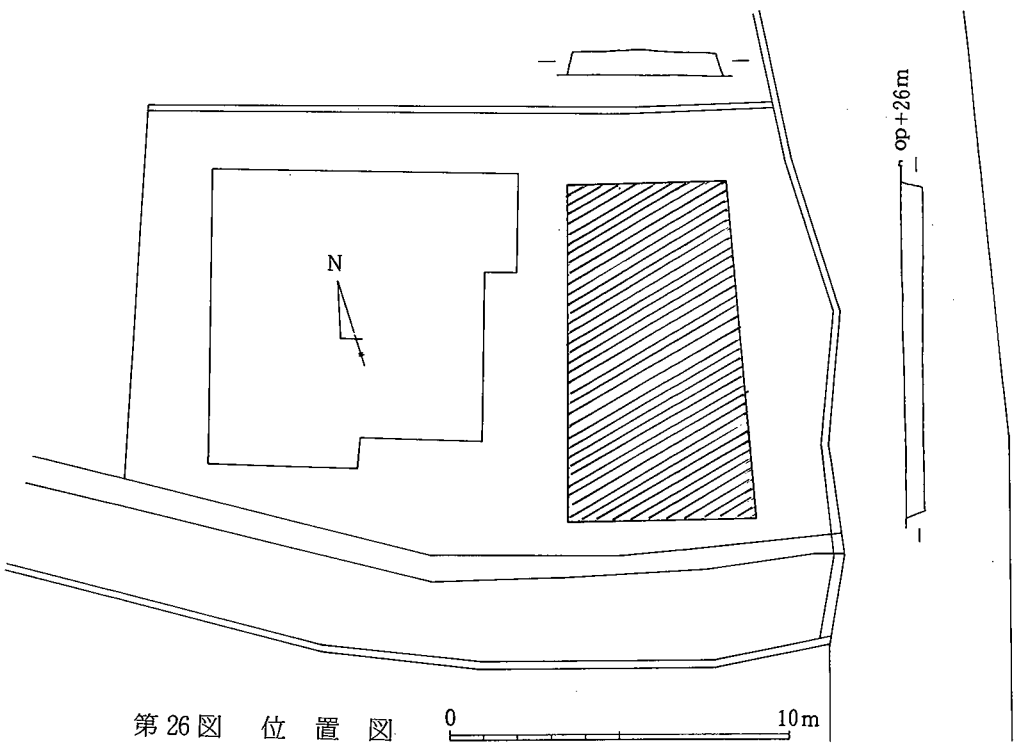
第25図　瓦の部分名称

第 2 篇　秦 廃 寺 跡

貝塚市の東北部、津田川へ流れ込む古淵川下流左岸の低位段丘上に位置する秦廃寺跡は市内の遺跡のうち古くから周知されており、半田字麻生川上明治時代末まであったとされる麻生河王子社の跡附近の開懇により多数の瓦が出されており、戦前より先学により紹介されている。また引きになるが和泉布史によると「和金秦寺は木嶋寺とも薬師寺ともいわれ、京都太秦広隆寺に蔵されている『広隆寺未寺等別院記』によると、この寺は天武天皇八年（680）十一月、秦勝賀佐枝によって建立されたものと伝え」と記載されている。又、航空写真をみるとミニ開発、府営住宅の建設等により少し変わりつつはあるが字麻生川あたりを中心にほぼ南北方向に約1町四方の区画が田地、集落と向きをかえ明瞭に認められる。79年度の調査にもみられるように村落内においても幾分か削平はされているが遺構がまだ保存されているところもある。今回の調査地は遺跡の東部にあたり、熊野街道沿いにのこされた唯一の畑地であったが事前着工となり、途中で前庭部を調査した。調査面積は約50㎡である。

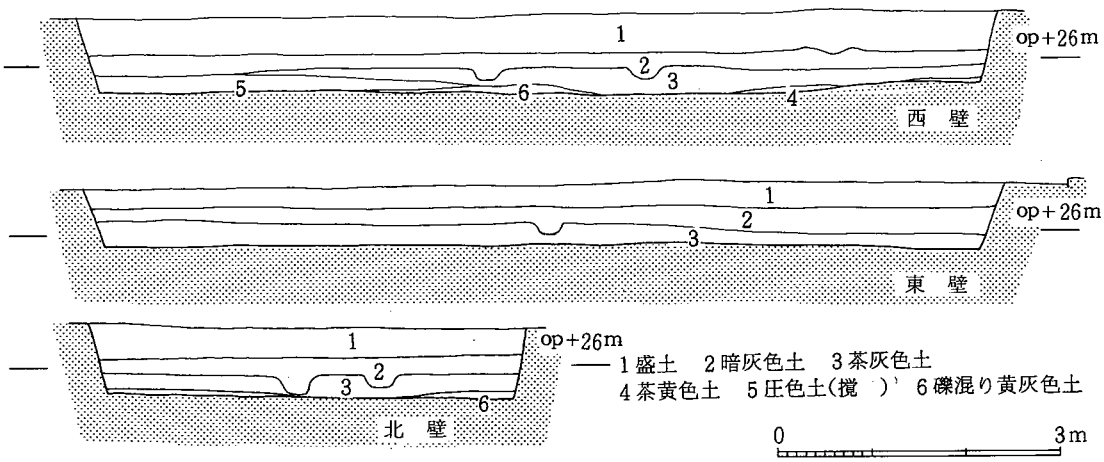
1. 層　位

造成工事が済んでいるため、30～40㎝の盛土がなされている。以下暗灰色土、茶灰色土、砂混り黄灰色土と続くが北西では茶黄色土もみられる。しかし南側はかなり撹乱されており、中央部



第26図　位　置　図

にも茶灰色土からの掘り込みがいくつかみられた。旧地表より30～40㎝で一応の面となる。茶灰色土には中近世の瓦、陶磁器片が、砂混り黄灰色土上面には白鳳期の瓦も出土した。



第27図　断　面　実　測　図

2. 遺　　物

今回の調査により出土した器物は、白鳳～近世の瓦が大部分を占め、他に須恵器、土師質土器瓦質土器、陶磁器が出土した。以下概略を記しておく。

土　　釜

土師質、瓦質の羽釜が数点出土している。

1は復原口径22.6㎝で口頭部はやや内質気味で端部は外へ少しはみだし気味で平らにおれる。外面は凹線風の段を有す。鍔は上方へ弯曲気味で端部は丸くおさまる。体部外面には横方向の荒いヘラ削りが施される。

4は復原口径25.4㎝で、口頭部は内傾し端部は平らとなる。外面には段を有し、鍔はほぼ水平につく。口頸部内面は横ナデが施され、下文には横方向のハケ目がみられる。

3は復原口径23.2㎝で、口頸部は内傾し端部は平担におれる。外面には凹線状の段を有し、鍔はほぼ水平となる。かなり摩耗しているが、体部には煤の附着がみられる。

2は復原口径20㎝の瓦質の羽釜である。口頭部は短く内弯気味で端部は外方にはみだし丸い。鍔はほぼ水平ではあるが端部はややもち上げ気味で丸い。内面にはハケ目がみられる。

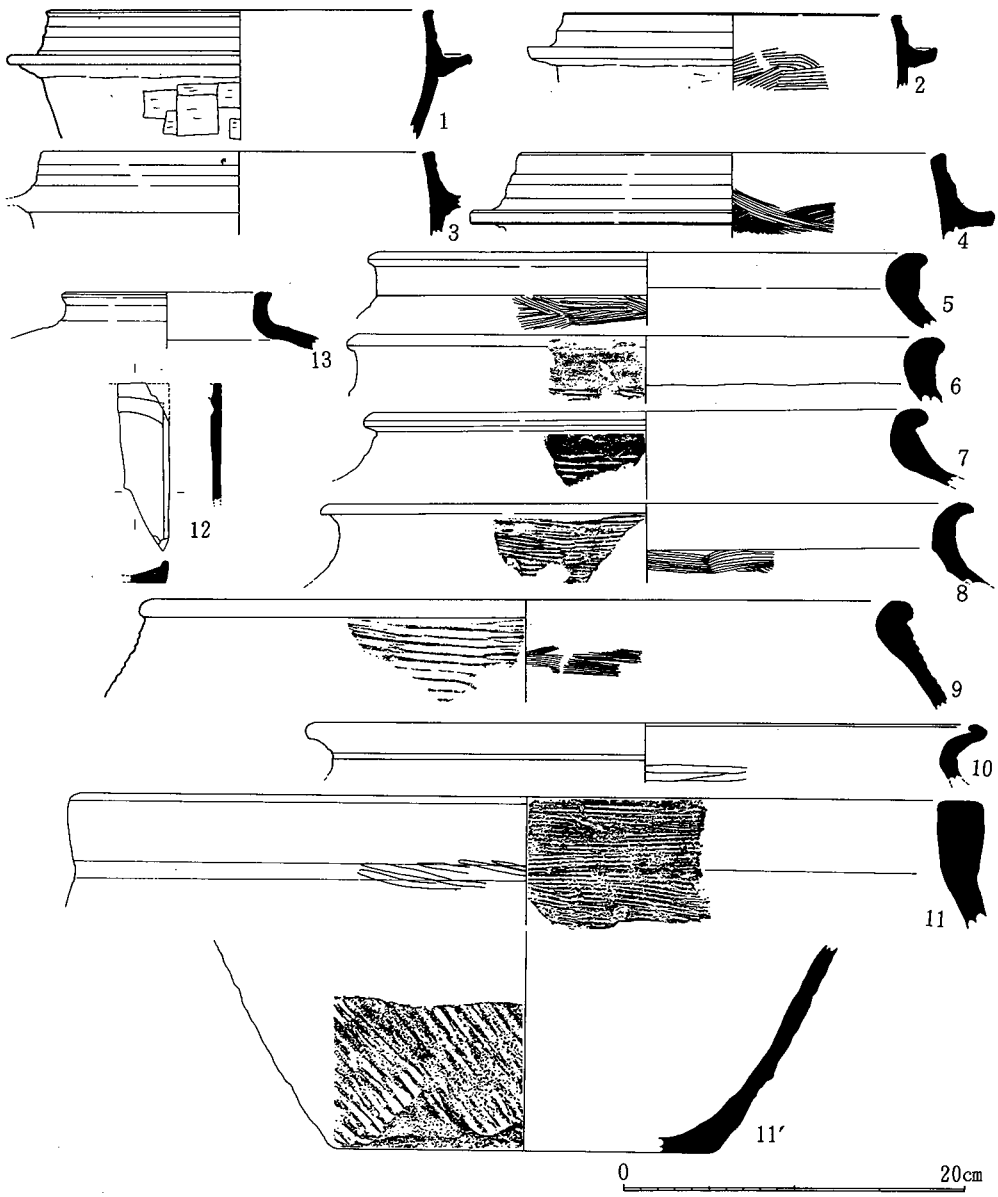
甕

土師質、瓦質のものがみられる。

5は、ほぼ直立する頸部から外方へ折り曲げた口縁端部を有す。復原口径33㎝の瓦質で、体部

は外面に叩き目、内面に横方向のハケ目が施されている。

6は、ほぼ直立気味に外弯する口頸部を有し、端部は外方に折り曲げるが太い。復厚口径30.4㎝の瓦質で、肩部外面に叩き目、内面にハケ目が施される。



第28図　遺物実測図

7は内傾気味の短い頸部から外反する口縁部を有し、端部は外方へ折れ曲がる。復原口径23.4㎝で、外面には叩き目、内面には横ナデが施されている。

9は、外弯気味の口縁部に端部は外下方へ折り曲げている。復原口径44㎝で、外面に叩き目、内面ハケ目が施され、口縁部からすぐ外下方へ体部がのびる。

8は直立気味の頸部に外弯する口縁部となり端部は少し曲がっている。復原口径37.2㎝で頸部から叩き目が施されている。内面には横方向のハケ目が認められる。

11は復原口径53.4の大型の土師質甕で、 厚い直立口縁に外面は少しふくらみ気味で甚しいハケ目が、内面にはハケ目が施されている。なお底部には内面にナデ調整によるものとハケ目によるものがみられる。色調は乳橙色。

10は「く」の字形口縁部に内上方へ折り曲げた端部を有す復原口径39㎝の土師質である。

陶　磁　器

陶磁器類の出土は極めて小数で、小破片も含めてわずかに２８点を数えるにすぎない。また、そのうちの半数近くが所謂染付であり、その他には中国製青磁椀２点、唐津焼椀１点、備前焼壷１点、瀬戸椀３点が含まれる程度である。

時代的には青磁椀が14世紀まで逆るほかは、大半が17世紀から18世紀にかけての遺物である。近・現代遺物も２～３点混入していたが、以下その形態を推測しうるものについてのみ、解説を加える。

14……口径10.２㎝、器高4.２㎝を測る伊万里焼の椀である。体部には「五三の桐」の文様が描かれており、呉須の発色は淡い藍色を呈す。砂高台に重ね焼きの痕がみられる。胎土は細かく、白色である。

15……伊万里焼の皿である。体部内面・外面、高台内部・外面ともに淡い呉須による文様が描かれ、体部内面は濃技法の胎土は白灰色、高台は低く、貫入は全く見られない。

16……伊万里焼の皿である。復元口径11.０㎝を測る。前記15と同様、体部内面・外面高台内部　外面に呉須による染付けが施されている。やはり体部内面は濃技法であるが、いかなる模様かは不明。内面はやや粗い貫入がみられるのに対して外面の貫入は細かい。胎土は白灰色が低い高台を持つ。

17……灰釉系統の瀬戸椀である。高台径4.６㎝を測る。胎土はやや砂っぽい白黄色で、残存部一面に細かな貫入が夥しい。高台内には兜巾の痕跡が認められる。（17ｃ後～18ｃ初）

18……中国製の青磁椀である。高台径5.２㎝を測る底部のみの破片である。高台内部には釉を施しておらず露胎。また兜巾が明瞭に残る。釉は緑味を帯びており、光沢がある。砂粒を含む胎土は灰色で、貫入が見られる。

19……唐津焼の磁器椀である。復原口径12.0㎝を測る体部のみの破片である。色調はやや緑がかった暗灰色を呈し、染付文もほとんど暗緑色に近い色を呈す。模様は口径部に沿って×状の重なりを持つもの。体部中央の模様は不明。細かな胎土は暗灰色で、貫入も多くみられる。

20……染付の瓶子である。体部中央に呉須で描かれた模様は、濃技法をも用いて淡青色を呈するが、いかなる模様かは不明。ロクロ使用による成形で内面には横ナデの痕跡。もちろん釉はかかっていない。胎土は細かく白灰色を呈す。貫入は全くみられないが、気泡の痕跡あり。

21……灰釉系統の瀬戸椀である。底部のみの破片で高台径5.0㎝を測る。釉は肩方畳付を除いて全面に施釉。高台はやや高く、兜巾の痕跡が認められる。胎土はやや砂っぽい白黄色で、細な貫入が夥しい。

22……灰細系統の瀬戸椀である。復元口径9.6㎝、器高7.3㎝を測る。前記0.11とほとんど同じであるが、兜巾を消し取ってあるのと体部表面に気泡の痕跡の目立つのが特徴的である。内面見込みに重ね焼きの痕跡。（17ｃ後～18ｃ初）

13……備前焼の種壷である。復原口径は14.0㎝を測り、やや小型の壷であるということができる。口縁部のみの破片である。表面は暗茶褐色を呈し櫛描波状文を有する。胎土は赤茶褐色で砂粒を若干含む。（16ｃ後半）

（梅田）

第29図　陶　磁　器

屋　瓦

今回出土した遺物のなかで、圧倒的に多いのは屋瓦であった。屋瓦は、主として平瓦、丸瓦が出土しており、軒平瓦・軒丸瓦は数点を数えるのみである。そのうえ全点小破片での出土であり、完形品は一点もなかった。

複弁蓮華文軒丸瓦　図版第十四(1)

周縁部のみ約5分の1遺存。周縁の内斜面には、二重長方郭内に一縦線を画した文様を配する。内区に八弁の複子葉弁を配し、それぞれの弁内に間弁を配している。中房は、明瞭に蓮弁と区画することができ、1＋6の縁どりをした蓮子を配していると推定される。周縁の上部はヘラ調整。胎土は、砂粒、黒色粒を含み、青灰色を呈す。焼成良好。

1

単弁蓮華文軒丸瓦　図版第十四(2)

内区（花弁の間弁、子葉部分）のみ約5分の1遺存。瓦当径約16㎝。周縁には唐草文を配し、内区には、ややふくらみをもつ八弁と、その1つ1つに間弁を配し、中房は、明瞭に蓮弁と区画することができ、1＋6の縁どりをした蓮子を配していると推定される。調整は不明。胎土は、砂粒、黒色粒、金雲母を含み、金雲母を含み、瓦当部、裏面とも黒褐色を呈す。焼成良。

2

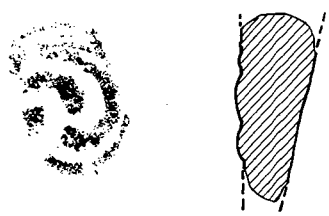
三巴文軒丸瓦　図版第十四(3)

瓦当部のみ約4分の1遺存。瓦当径約13㎝、巴の先端部は円形で、頭部と尾部の間が大きくくびれ、尾は右巻きで細く長く続く。直径6㎜の珠文12個(うち2個遺存)を配し、珠文の間隔は広い。周縁は5㎜と浅く無文である。瓦当部裏面にロクロ痕がある。胎土は小礫含み、暗黒灰色を呈す。焼成良。

3

三巴文軒丸瓦

内区巴文のみ遺存。やや太めの巴先端部分が円形をなし、頭部と尾部の間に若干のくびれがみられる。尾は巴のまわりを半回転ほどの長さで左巻きに後にひいている。周縁には珠文が配されていると推定されるが個数、調整は不明。胎土は砂粒および小礫を含み、淡白灰色を呈す。焼成やや軟。



4

三巴文軒丸瓦　図版第十四(5)

瓦当部のみ約4分の1遺存。瓦当径約13㎝。巴の先端部は円形で、頭部と尾部の間が大きくくびれ、巻方向は左巻きである。直径8㎜の珠文16個(うち3個遺存)を配す。瓦当面には離れ砂がつく。内区のうちこみ部分が3㎜と浅く、周縁は無文である。

5

周縁上部は、指おさえのあとヘラ調整。胎土は砂粒、雲母含み、暗灰色を呈す。焼成やや軟。

三巴文軒丸瓦

瓦当部周縁と外区のみ約7分の1遺存。瓦当径約14㎝。外区には、直径7㎜の珠文22個(うち3個遺存)を密に配す。周縁は無文である。胎土は砂粒を含み、暗灰色を呈す。焼成良。

6

三巴文軒丸瓦

周縁部と外区少々約4分の1遺存。周縁は4㎜と低く、幅が一定せず雑な感じを与える。周縁上部はヘラ削りを施す。胎土は砂粒、礫を含み、瓦当面銀灰色、瓦当上面は淡灰色を呈す。焼成良。

宝珠唐草文軒平瓦　図版第十四(8)

瓦当部のみ約2分の1遺存。宝珠を中心に4巻の均整唐草文が遺存する。文様の上下に凸線(巻線)がみられる。外区には文様を有さず、直に周縁へとつづく。周縁の幅は1㎝である。頸の形は段頸形式の浅頸に近いもので、剥離面からの詳しい観察は困難である。胎土は雲母、黒色粒、微砂粒含み、瓦当部は淡黄土色を、瓦当上部は暗灰色を呈す。焼成良。

8

唐草文軒平瓦　図版第十四(9)

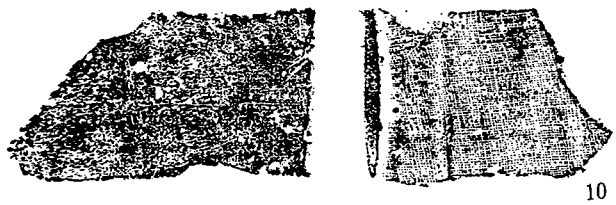
瓦当部のみ約3分の1遺存。中心部を欠失しているため、中心飾り附近の文様は不明である。周縁両側縁部は、かなりの余白を生じる。これは、軒丸瓦が被覆される部分の文様を省略するという合理的発想から生じたものと考えられる。頸の形は段頸形式の中頸に近いもので、瓦当面上部、文様部分の上下、左右はヘラ削りによる面取りが行われている。胎土は微砂粒、黒色粒を含み、淡灰色を呈す。焼成良。

9

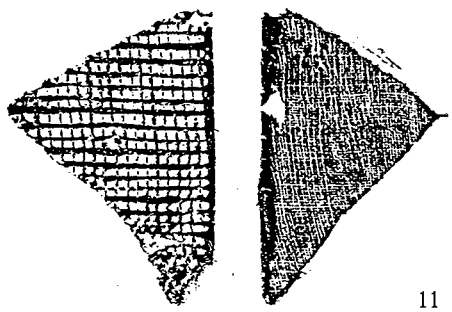
出土平瓦と丸瓦の割合は、相対的にみて5：2であった。凸凹面の成形法とその調整法、端面の面取りの有無とその施し方などから分類した。

第Ⅰ期の平瓦(10)(11)

凸面は、叩きの上を横ナデ調整により、完全な磨り消しがおこなわれている。凹面には糸切痕が残り、枠板圧痕、布目がみられる。布目は比較的細かく11×10／㎠～9×9／㎠。また側面のカットから、桶巻作りによるものである。厚さ1.7㎝～2.2㎝。約3分の1須恵質のものがある。胎土は淡灰褐色又は、白灰色を呈し、焼成良好。凸面に縄目叩きのあとがあり、その上にナデ調整が施され、桶巻作りで、分割截面に面取りが施されており、凹面に枠板圧痕が残り、布目10×9／㎠と細かく、胎土は黒色粒を含み、厚さ2.1㎝、焼成良の瓦がこの期の未頃のものであると思われる。また、須恵質の中で、凸面に明瞭な格子叩きが施され、凹面の布目9×8／㎠厚さ2.1㎝桶巻作り、淡青灰色を呈するものが1点みられる。



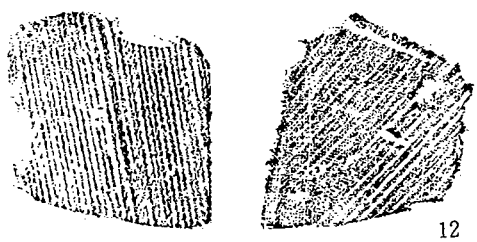
10



11

第Ⅱ期の平瓦(12)

凸面に明瞭な縦位の縄目叩きがみられるものや、斜方向の縄目叩き痕のあるもの、条間の狭い縄目叩きが不規則に施されてあるもの、縄目叩きの上をナデ調整したとみられるものがあり、凹面には糸切痕が残り布目が残るものや、布目の上をナデ消したあとがあるようにみえるもの、布目を意図的に消しているものがあり、側面は軽く面取りがなされている。一枚作りで、厚さ1.7～2.1㎝、胎土は小礫を含み、淡黄褐色、青灰色を呈し、焼成良のものが4分の3を占める。他は桶巻作りで凸面は、縦位の縄目叩きの上にナデ調整、凹面には糸切痕が残り、布目もみられる。厚さ1.8㎝、胎土は砂粒、礫、黒色粒を含み、淡黒褐色を呈し、焼成良である。なお、この期の須恵質のものでは、凸面に狭いもので2㎝、広くて2.5～2.7㎝に10本の明瞭な縄目叩きがつき、厚さ1.7㎝、焼成堅緻なのが特徴的である。

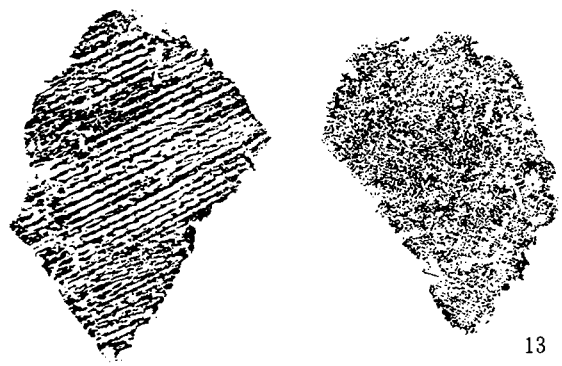


12

第Ⅲ期の平瓦(13)

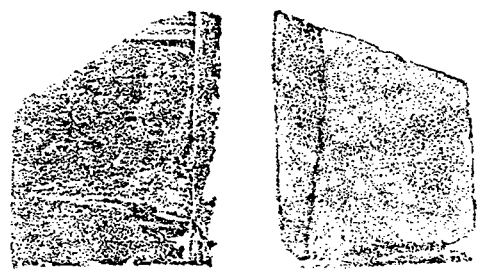
凸面には3.8～4.1㎝に10本の条間の広い縦位の縄目叩きがつく。凹面には糸切痕、布目圧痕が残り意図的な布目消去はなされていない。厚さは2～2.6㎝で、二次焼成をうけたとみられるものがある。胎土は砂粒、黒色粒を含み、淡白褐色を呈す。焼成良。この期の平瓦の出土量は少

なく、第Ⅱ期の瓦の約4分の1程度である。なお、第Ⅲ期のものであろうとおもわれる破片が3点存在する。いずれも凸面に砂を徹いた痕跡が認められ、糸切痕がみられる。縦位の縄目叩きは条間が広く、1点は斜方向の縄目叩きがみられる。凹面には糸切痕、布目圧痕がみられるが、布目はナデ消しているようである。厚さは2.1㎝前後。1点は須恵質で一枚作りとみられる。胎土は黒色粒を含み、青灰色を呈し、焼成良好。他の2点は砂粒を含み、白灰色、淡黒灰色を呈す。焼成良。


13

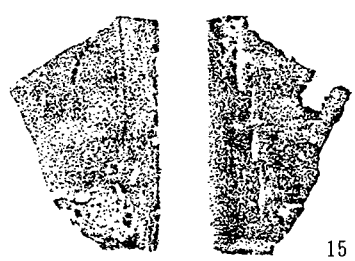
第Ⅳ期の平瓦(14)

出土平瓦全体の約2分の1を占め、その約5分の1が須恵質である。凸・凹面ともに砂を徹いた痕跡が認められ、特に凸面に顕著なものが多い。凹面には布目はみられず、糸切痕や、横位の約1.5～2.5㎝巾のヘラ調整痕がみられる。厚さ1.2㎝、軽く焼成の軟いものから、厚さ1.8～2.3㎝のものがあり、胎土は砂粒、黒色粒を含み、灰黒色、淡灰褐色を呈し、焼成良。須恵質のものは、2.1㎝前後の厚みをもち、胎土は砂粒、黒色粒、礫少し含み、灰褐色を呈し、焼成堅緻なものが多い。また、厚さ2.9㎝で、側面に細かい布目痕（17×17／㎠）が残っている。この期の道具瓦とみられるものがある。胎土は砂粒、黒色粒を含み、青灰色を呈し、焼成良。


14

第Ⅴ期の平瓦(15)

この期の平瓦は数点と数えるだけである。凸・凹面ともにヘラ調整が施され、厚さ2㎝前後、胎土は砂粒を含み、銀灰色を呈し、焼成は良。また、片面に砂粒、礫多く含み、厚さ1.5㎝、焼成堅縦な塼とみられるものも出土している。灰褐色を呈し、焼成良好。


15

第Ⅰ期の丸瓦

出土丸瓦の約5分の1を占める。凸面には、叩きの上を横ナデ調整が施され、横位のヘラ調整痕が残るものがある。凹面には枠板圧痕、糸切痕、布目がみられる。布目は9×9／㎠、10×10／㎠と細かい。筒部側面はほとんど面取りしていない。約3分の1が須恵質で布目は7×6／㎠と荒い。厚さ1.3～2.1㎝。胎土は淡灰褐色、白灰色を呈し、焼成良。

第Ⅱ期の丸瓦

出土丸瓦の約5分の2を占める。凸面に縄目叩きの上をナデ調整が施され、凹面には糸切痕と枠板圧痕、布目がみられる。筒部側面の面取りはなく、厚さ1.5、1.6㎝のものが多く、布目は8×7／㎠と比較的荒目。淡灰褐色を呈し、焼成良。

第Ⅱ期の丸瓦

この期に該当する丸瓦を見い出すことができない。

第Ⅳ期の丸瓦

出土丸瓦の約5分の2を占める。小片であるが、第Ⅲ期までの丸瓦に比べると原形に近い形で残っているといえる。凸面は叩きの上をていねいにナデ調整が施され、凹面には糸切痕が残るものもある。筒部側面には大きく面取りがなされている。燻したとみられるものもある。厚さは2～2.4㎝、須恵質のものは少なく、胎土は淡黒灰色、淡灰色を呈す。焼成良。

第Ⅴ期の丸瓦

軒先瓦についてはこの期のものとみられるものがあるが、丸瓦ではこの期に該当するものは見い出すことができない。

おわりに

以上のような分類により、丸瓦と平瓦の成形、調整法等により以下の様に組みあわせてみた。

Ⅰ－a　凸面　叩きの上を横ナデ調整による完全な磨り消し
　　凹面　糸切痕、細かい布目9×9～10×11／㎠　　淡灰褐色

Ⅱ－b　凸面　条間の狭い縄目叩きの上をナデ調整、叩きののこるものあり、叩きの幅
　　凹面　糸切痕

Ⅳ－c　凸面　叩きの上を完全な磨り消し
　　凹面　糸切痕

平瓦第Ⅲ期と第Ⅴ期に相当する丸瓦は、残念ながら今回の出土瓦の中で該当するものを見い出せなかったが、第Ⅲ期は平瓦からみて、凸面には条間の広い縄目叩きの上をナデ調整、凹面には糸切痕、布目が残るものが考えられる。第Ⅴ期には、凸、凹面ともにヘラ調整が施され、銀黒灰色を呈すものがあると考えられる。　（池内）

3. ま と め

今回の調査地は、中心部に近く畑地であったため、かなりの成果が期待されたが、置構は検出しえなかった。しかし調査により創建時と考えられる時代に近い軒丸瓦、平・丸瓦等を始め、近世にいたるまでの瓦が出土した。遺物量からみた場合、鎌倉・室町時代のものがかなりの割合を占めたようである。今後も住宅の建て替え等による調査と東側にのこされた水田・畑地の確認調査により遺跡の全容を明らかにしていきたい。

図　　版

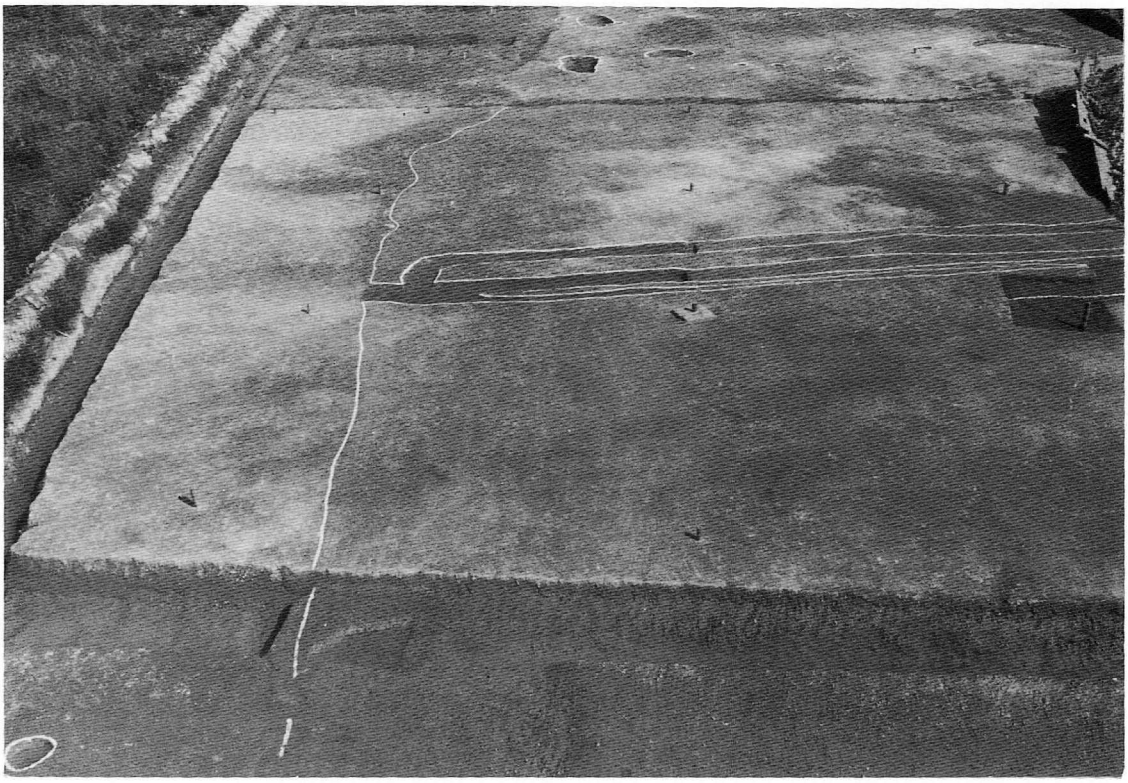
図版第一　遺跡周辺航空写真

全景　（調査前、東より）

第１区　東より

図版第三　新井・鳥羽遺跡遺構写真

遺構全景　南より



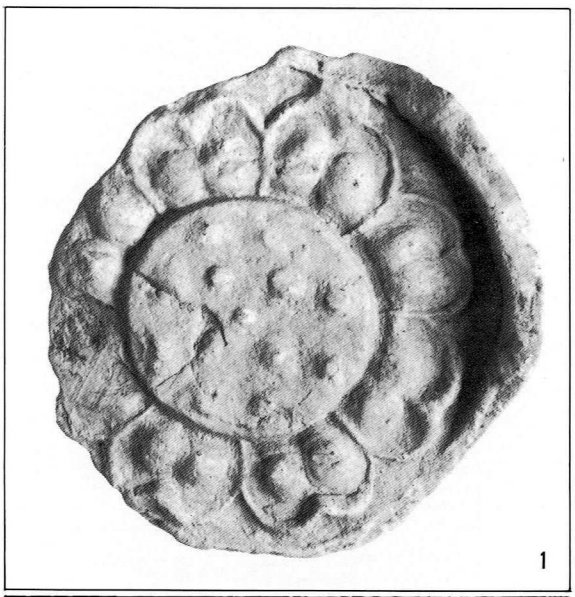
同上　北より

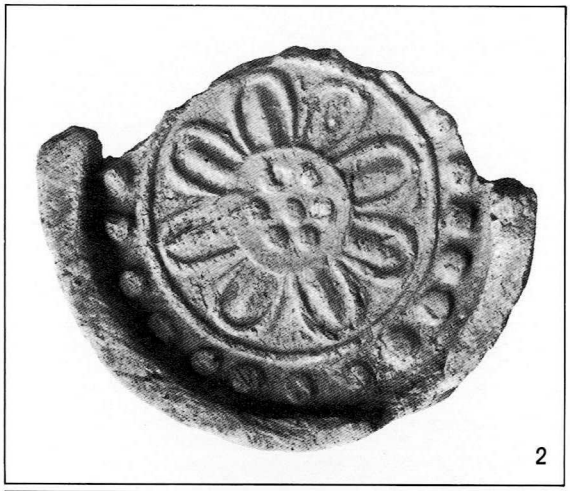
図版第四　新井・鳥羽遺跡遺構写真

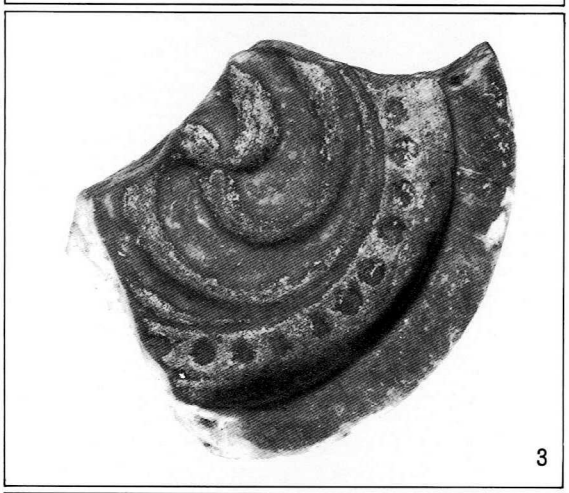
SK-A

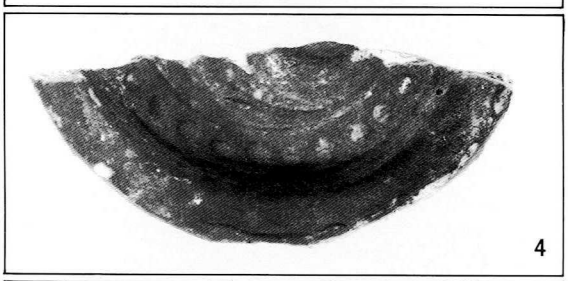
SK-B

図版第五　新井・鳥羽遺跡遺物写真

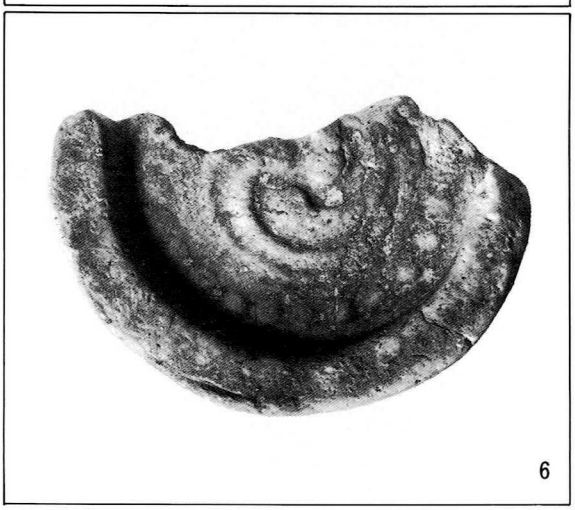

1


2

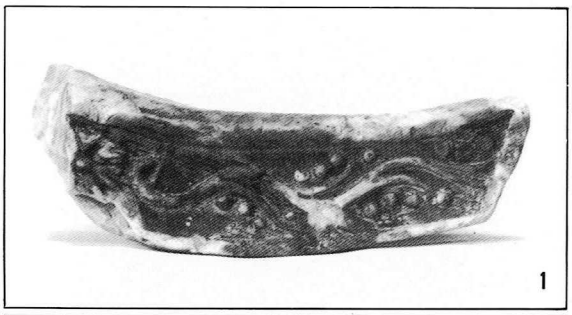

3

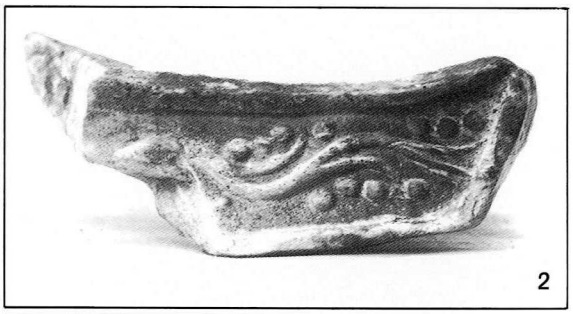

4

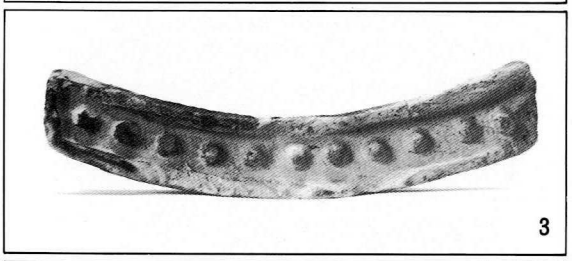
5

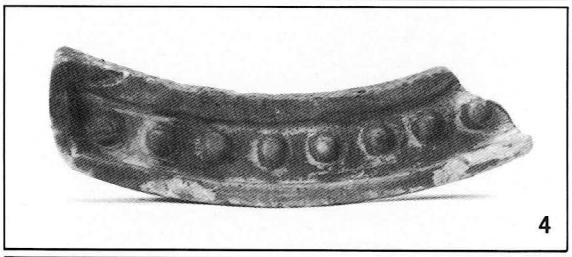

6

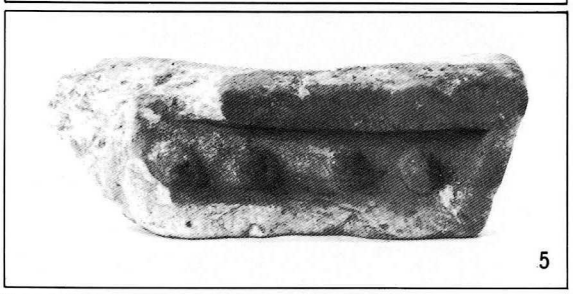
7

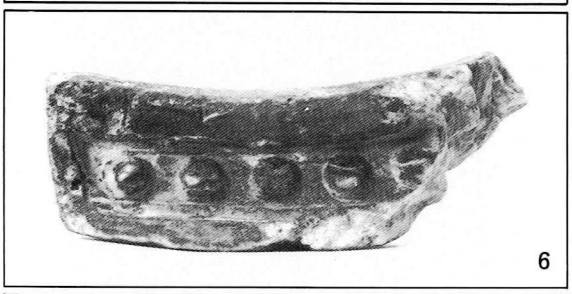

1

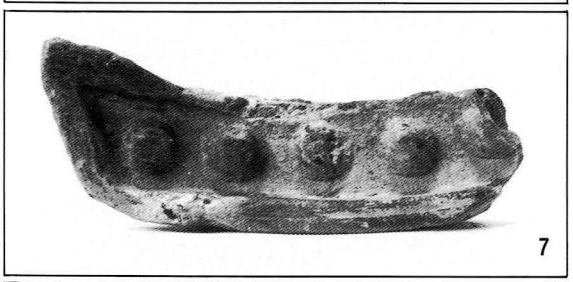

2

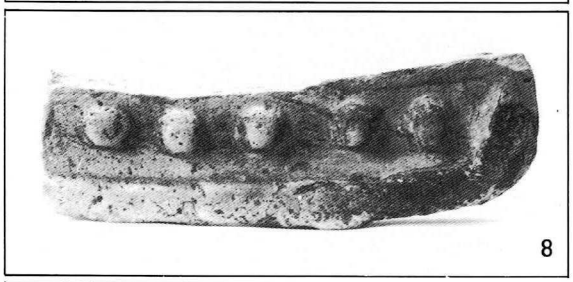

3

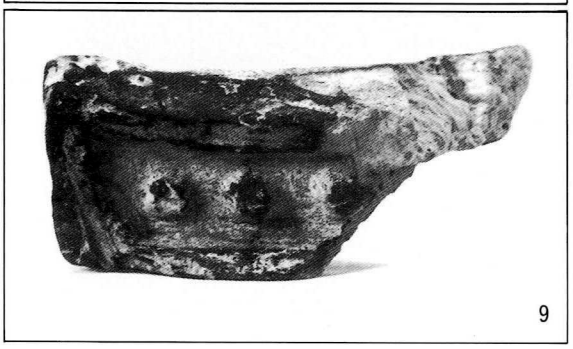

4

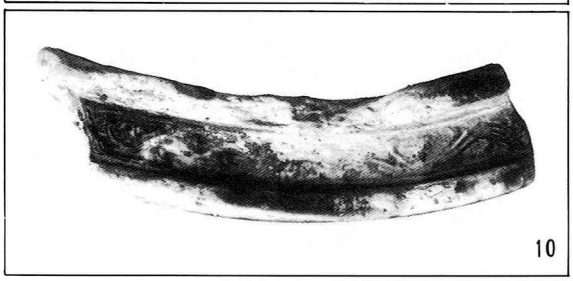

5


6


7

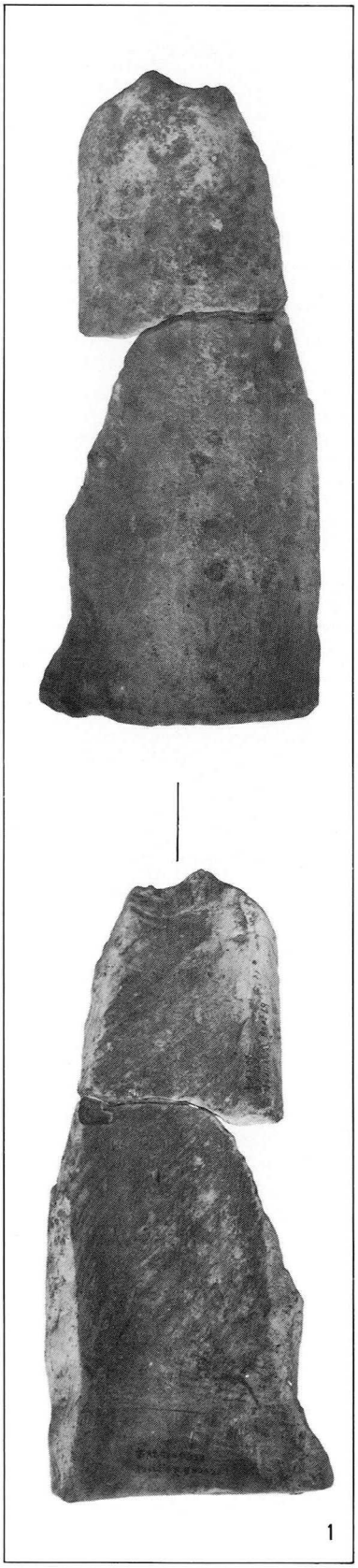

8


9

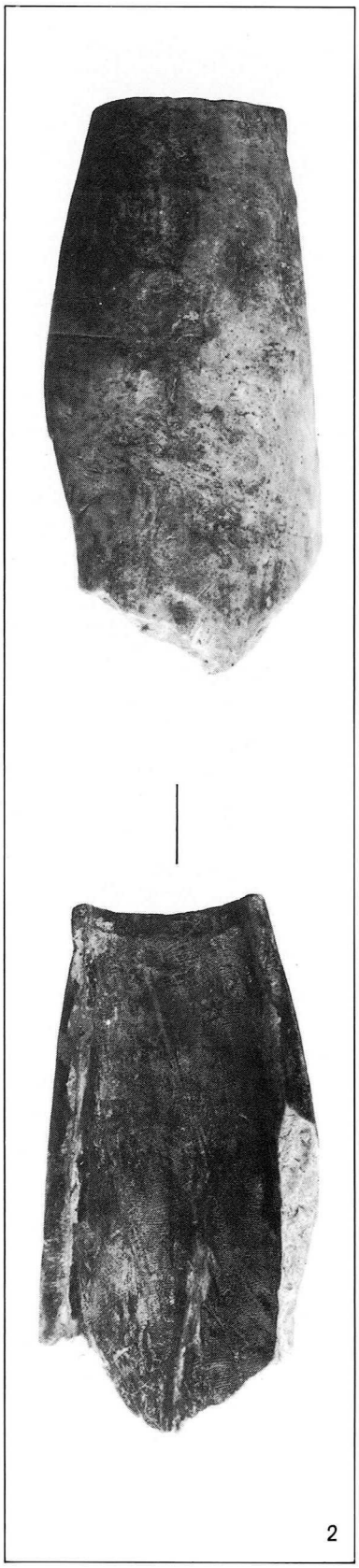

10

11

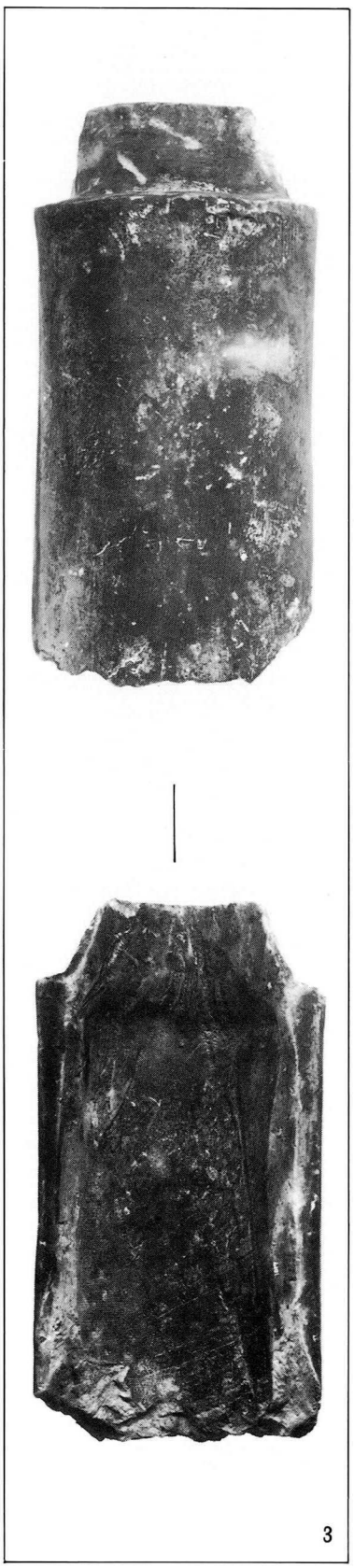
図版第七　新井・鳥羽遺跡遺物写真



1



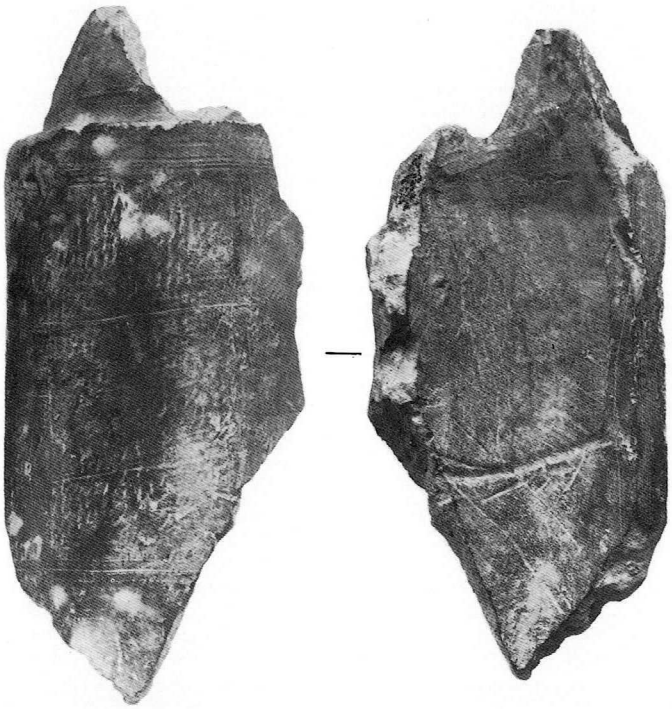
2



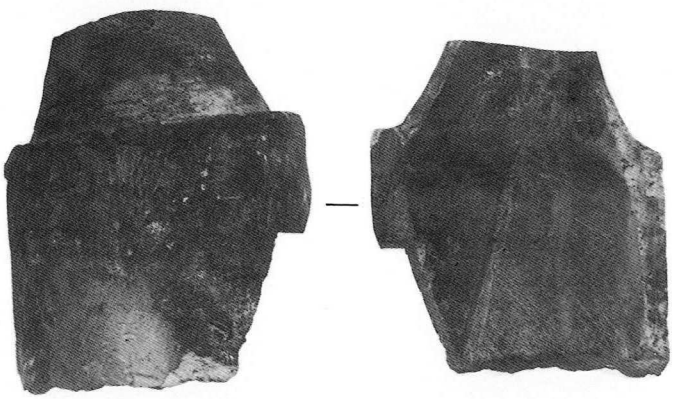
3

図版第八　新井・鳥羽遺跡遺物写真

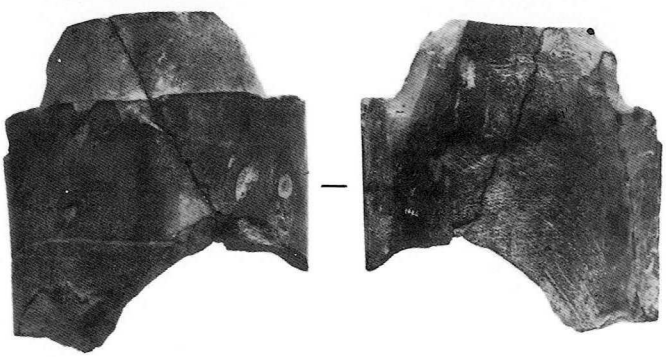
1



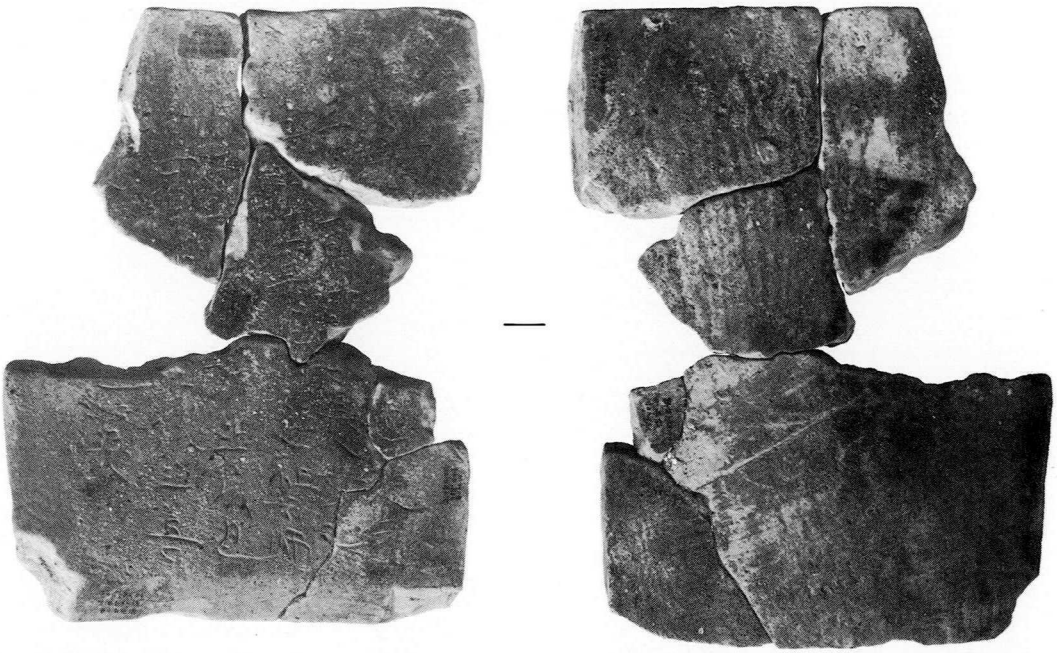
2



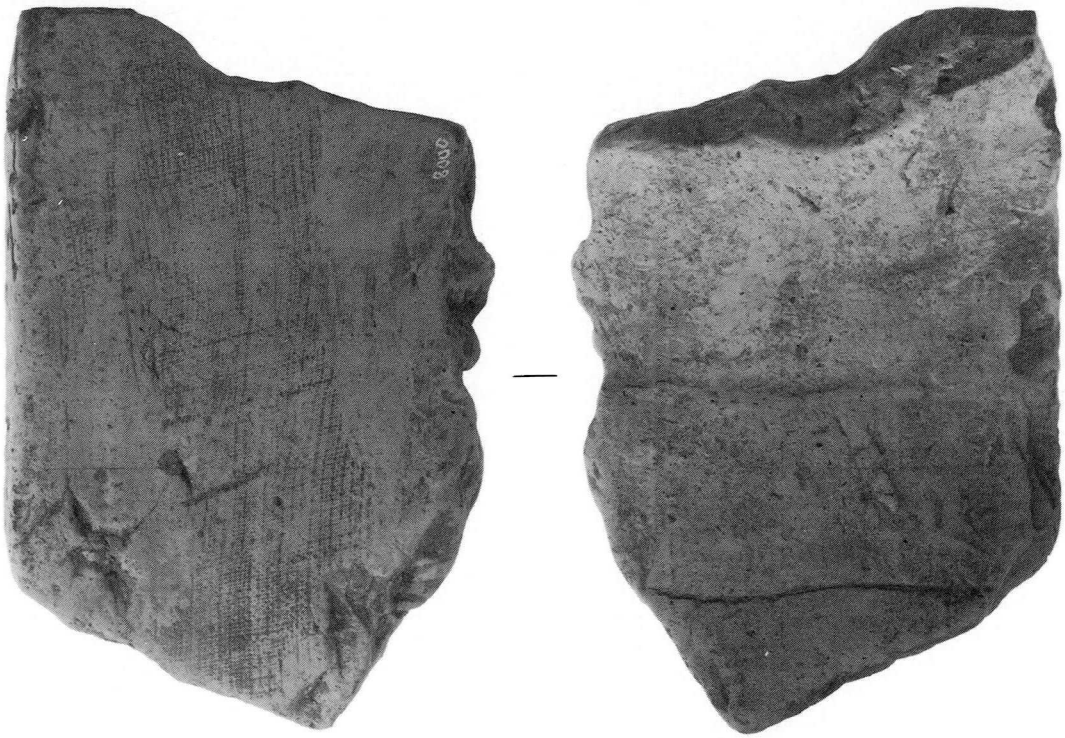
3



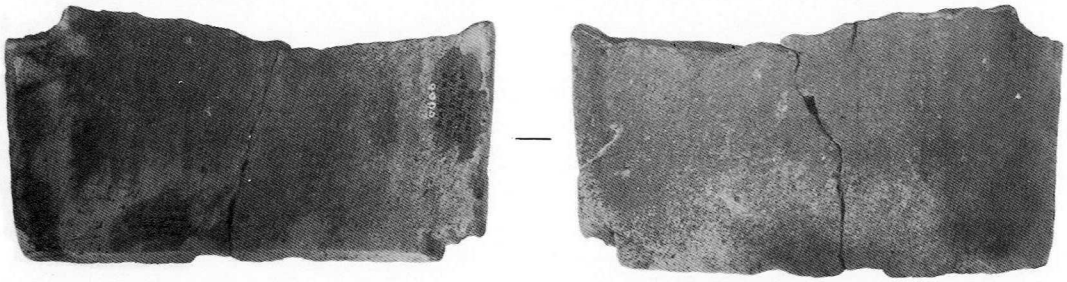
4



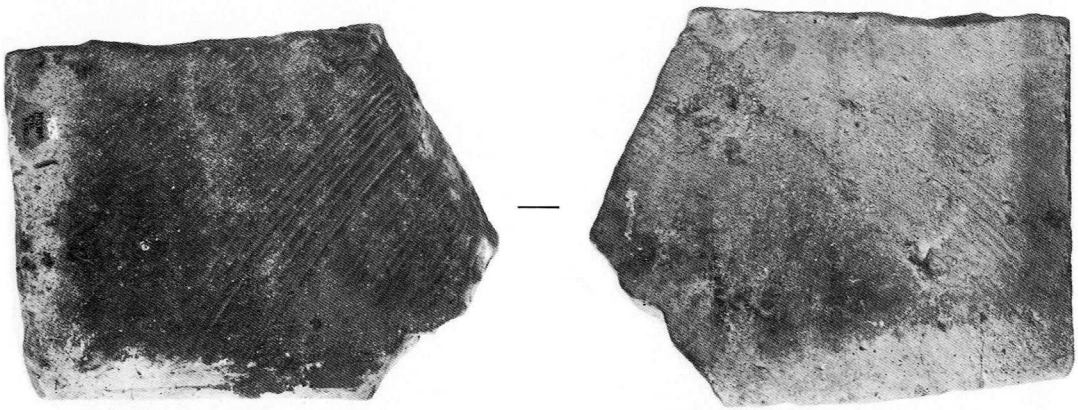
1



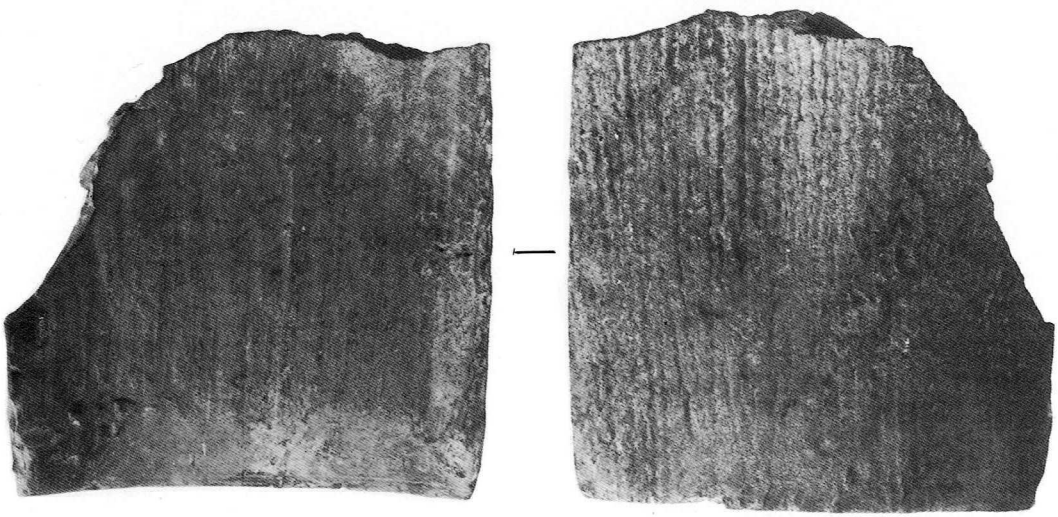
2



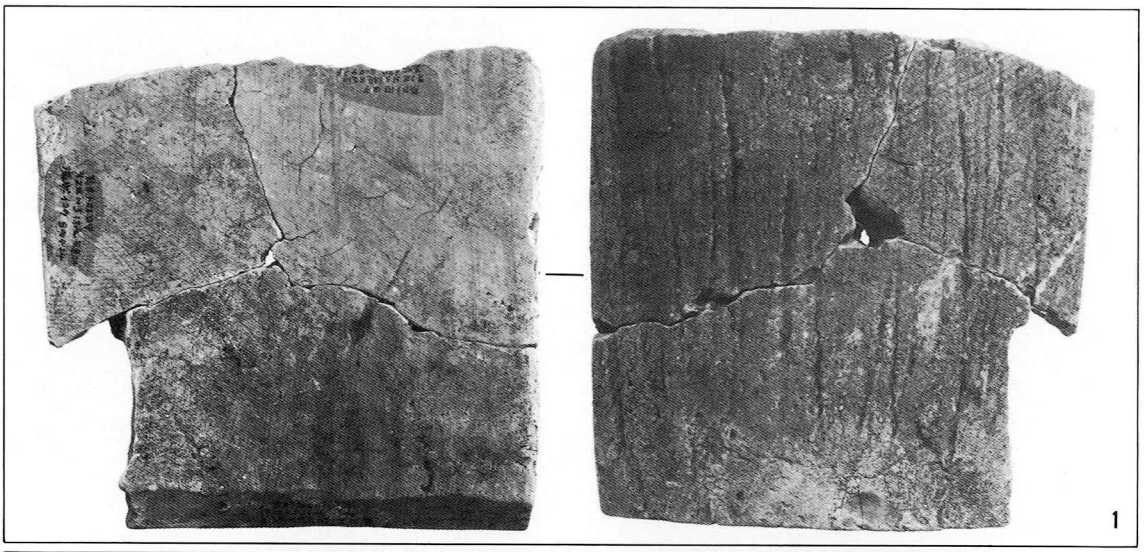
1

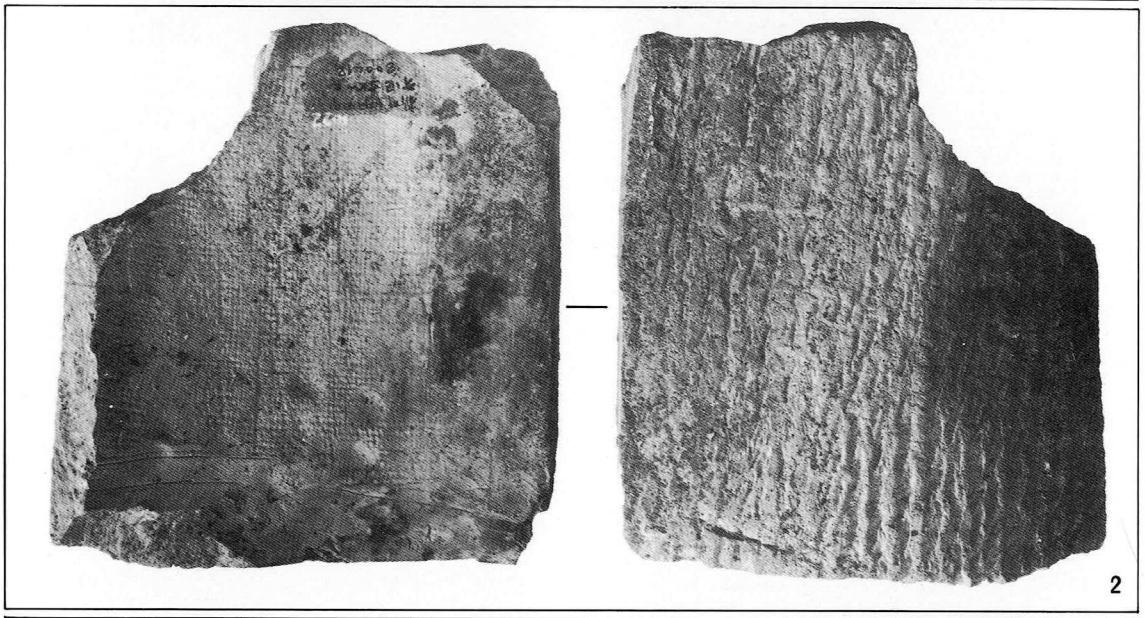


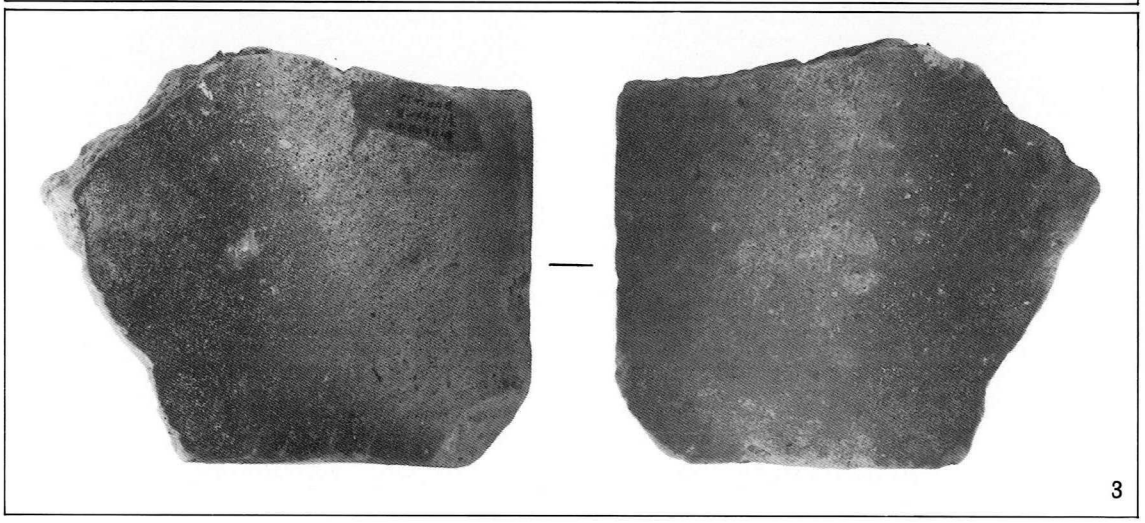
2



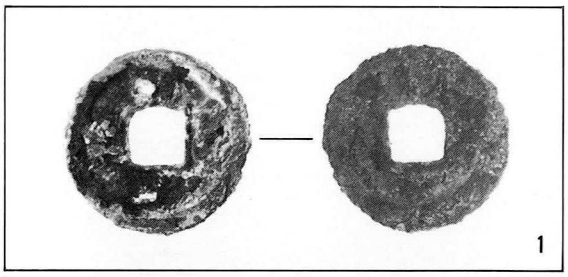
3

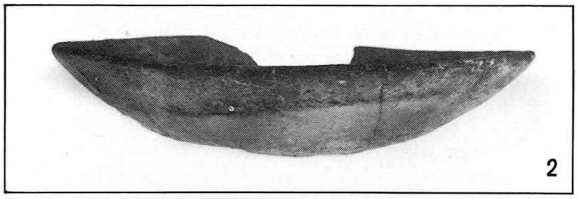

1

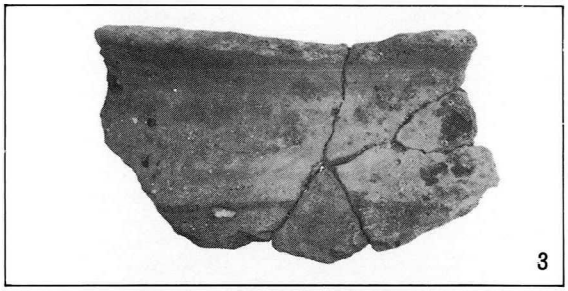

2

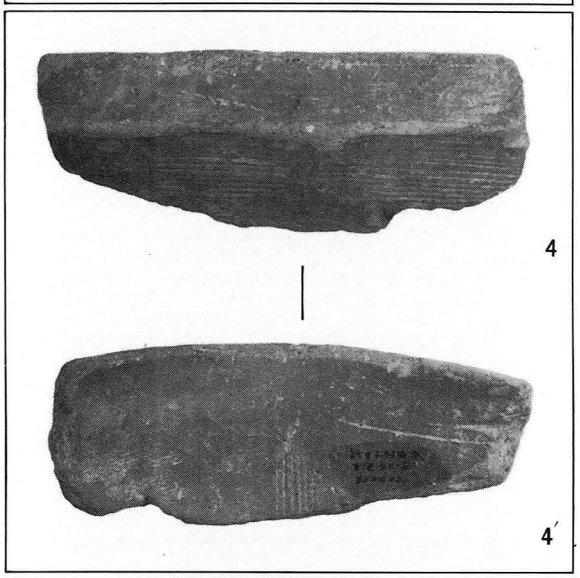

3

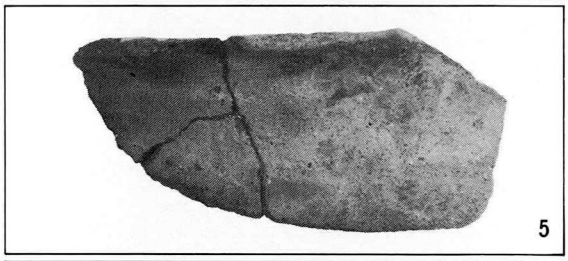
図版第十二　新井・鳥羽遺跡遺物写真

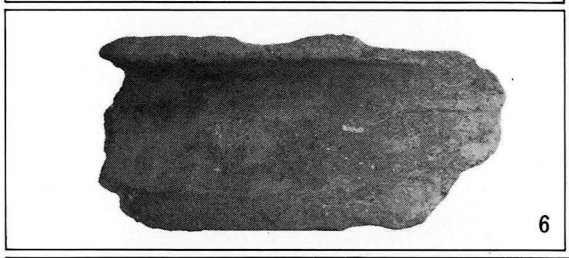


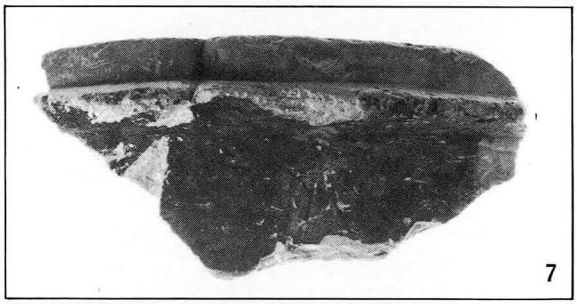


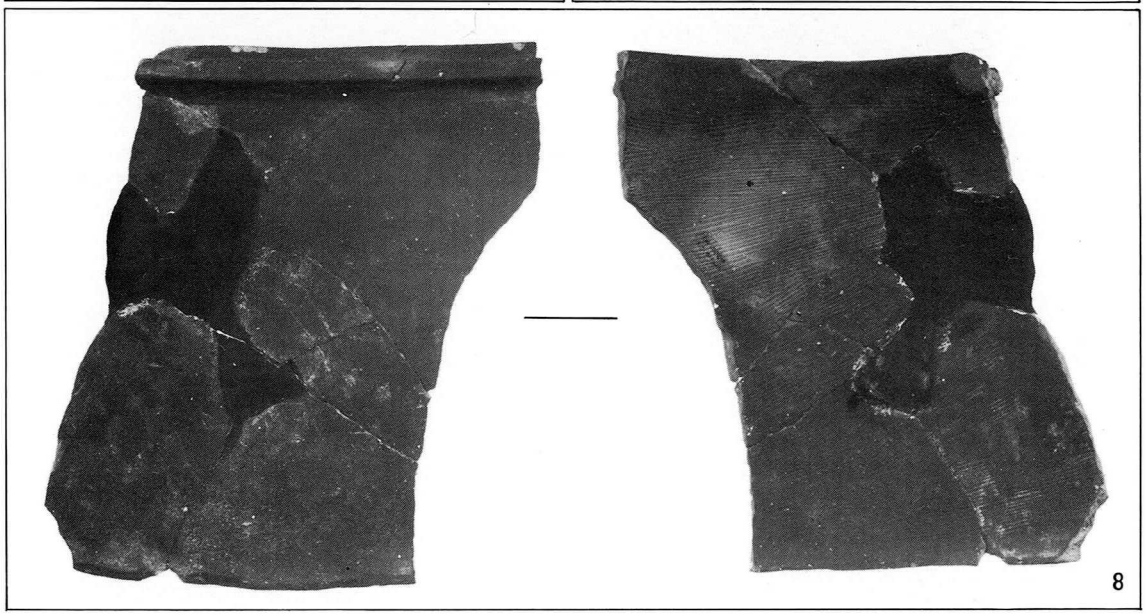




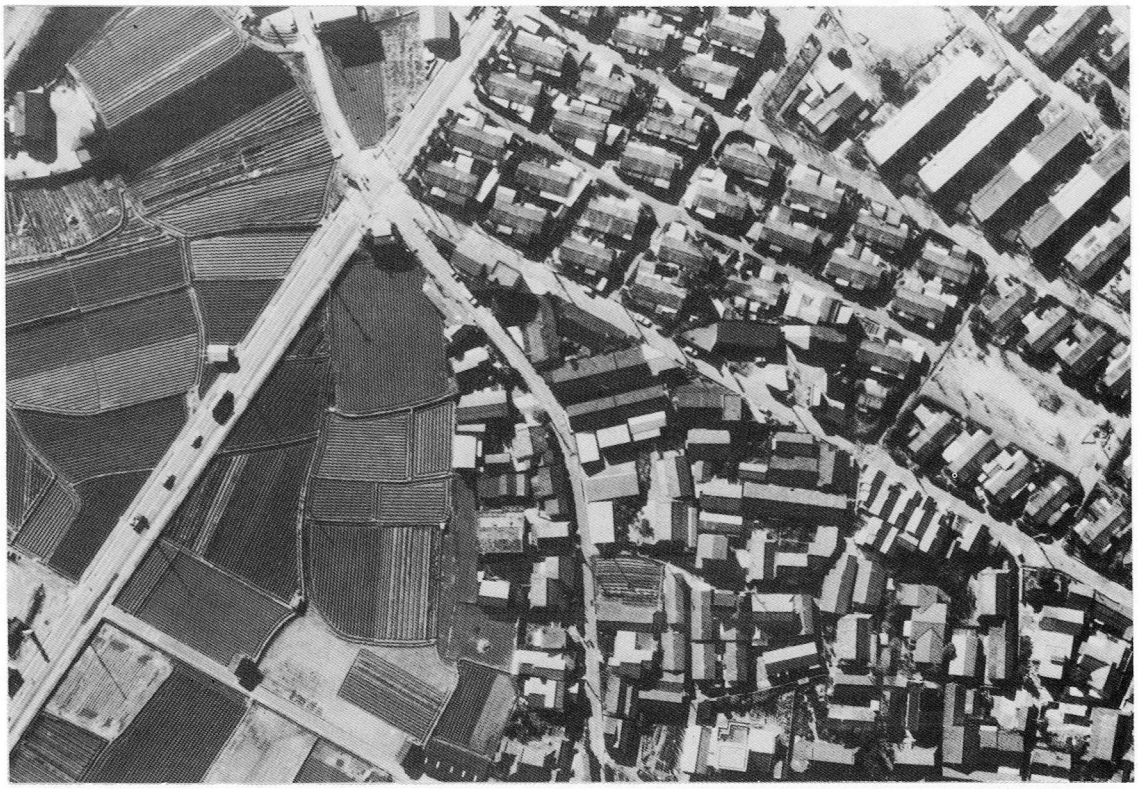




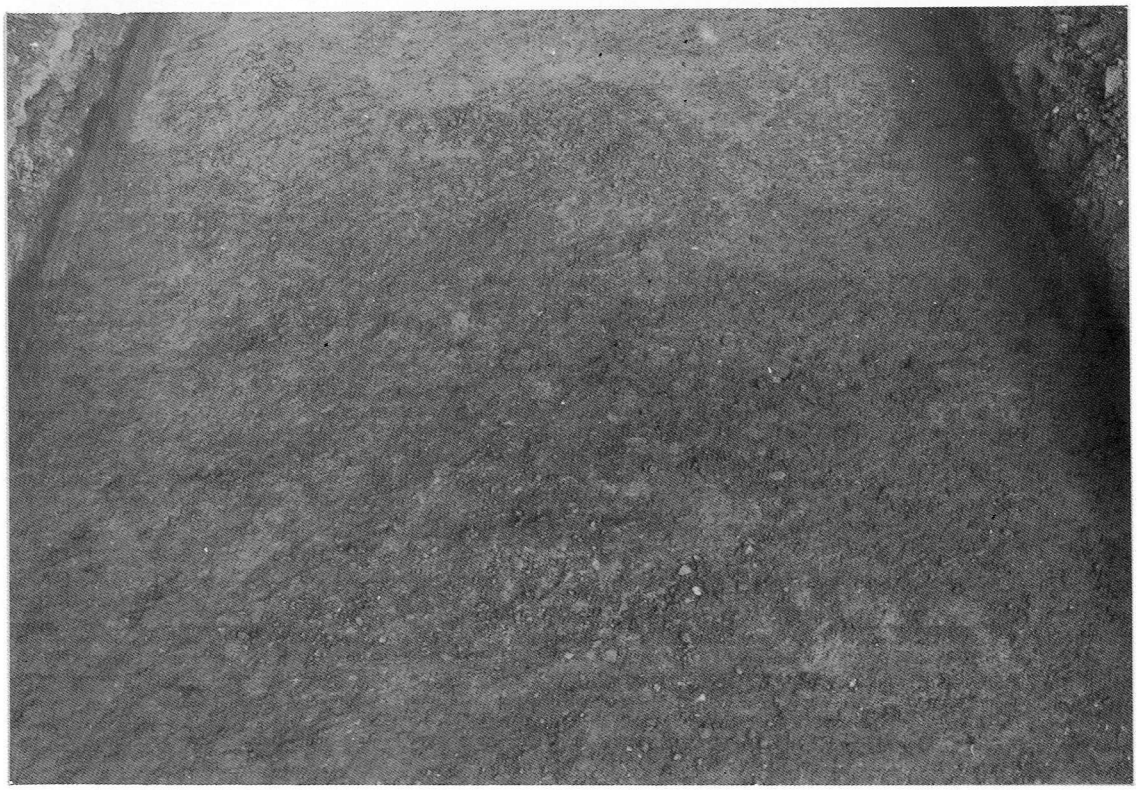




図版第十三　秦廃寺跡遠景・調査区写真

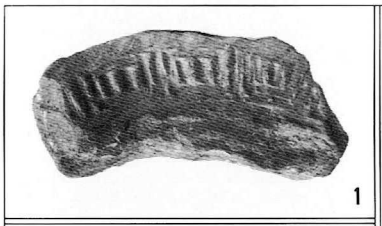


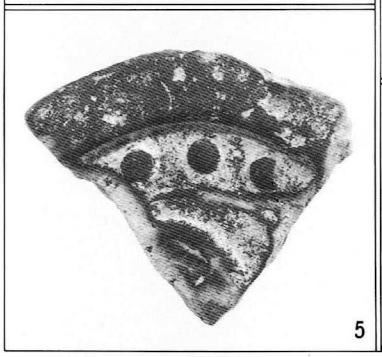
遺跡遠景

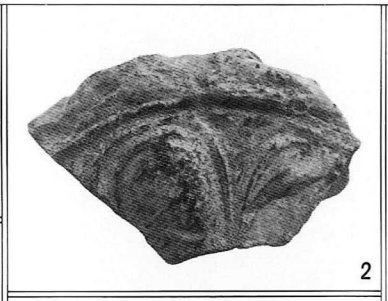


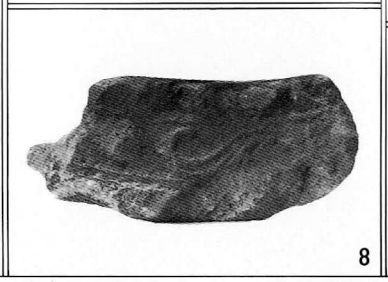
調査区全景

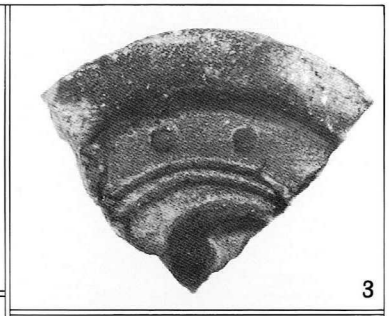
図版第十四　秦廃寺跡遺物写真

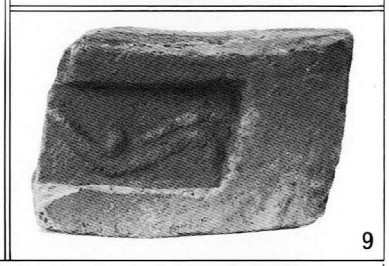

1

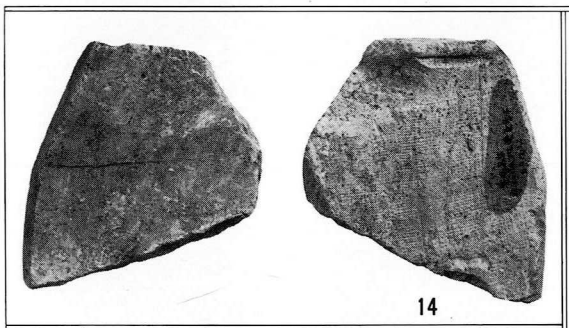

5

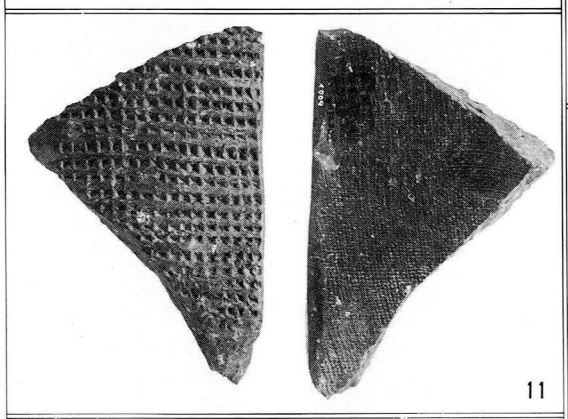

2

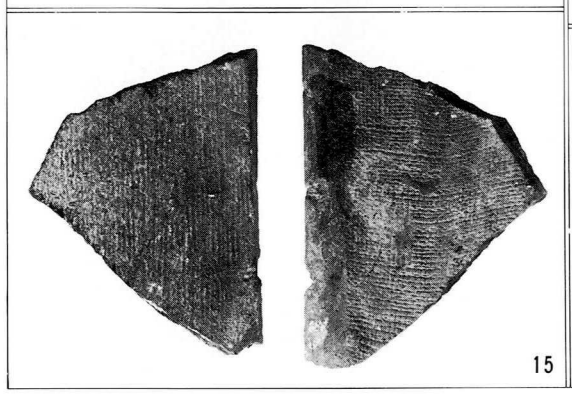

8

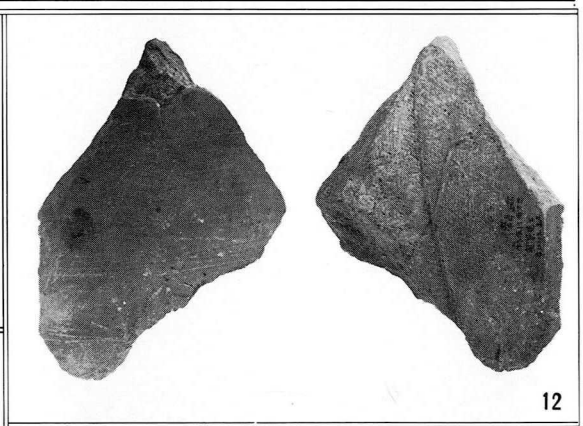

3

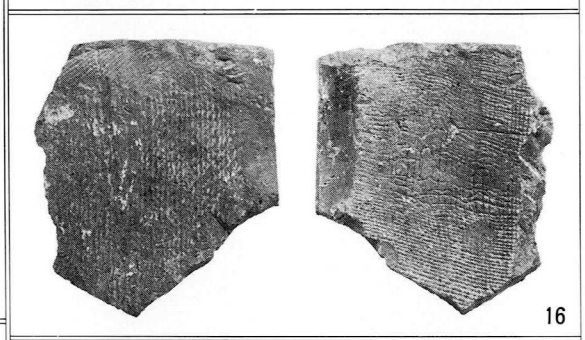

9

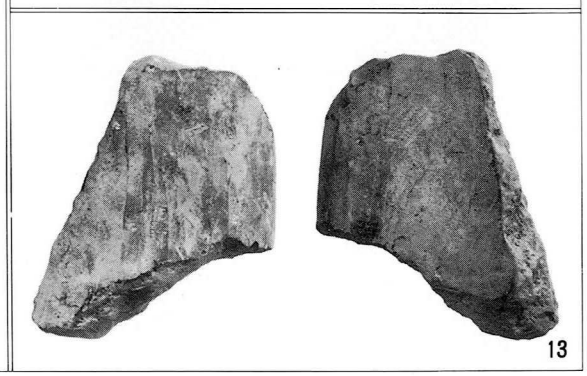
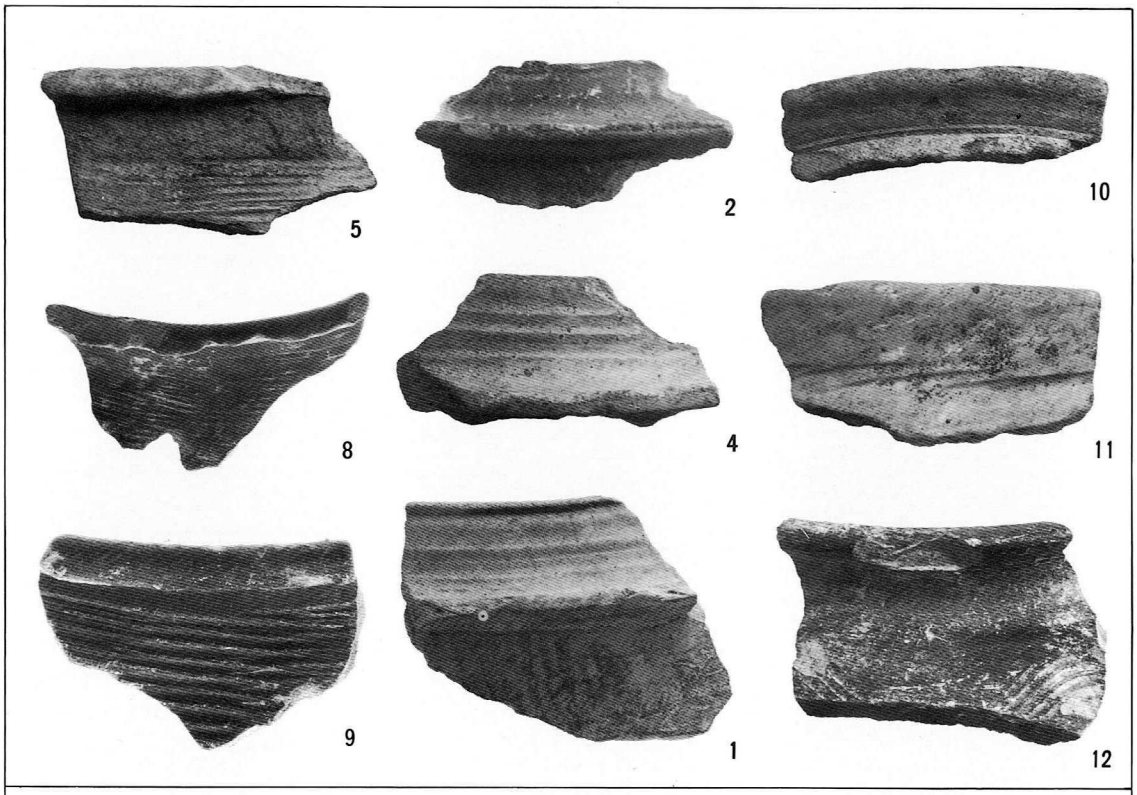
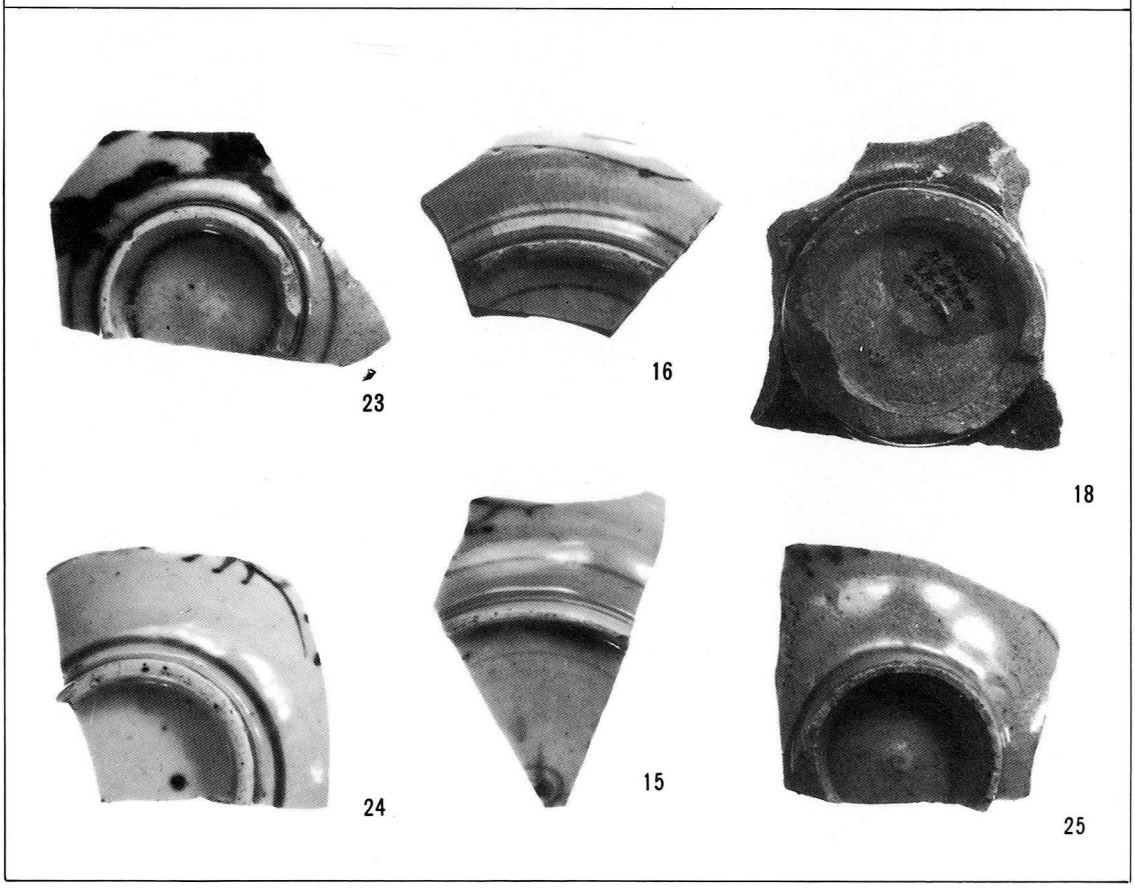

14


11


15


12


16


13

図版第十五　秦廃寺跡遺物写真